

DRESDNER KREUZCHOR

DRESDNER KAMMER PHILHARMONIE

Heike Hallaschka(Soprano)/Elisabeth Wilke(Alto)/Peter Schreier(Tenor)/Markus Brutscher(Tenor)/Egbert Junghanns(Bass)/Klaus Mertens(Bass)

Conductor (Kantor):RODERICH KREILE



ドレスデン聖十字架合唱団&ドレスデン・フィルハーモニー室内管弦楽団
1997年日本公演



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



ドレスデン聖十字架合唱団&ドレスデン・フィルハーモニー室内管弦楽団
1997年日本公演日程

DRESDNER KREUZCHOR & DRESDNER KAMMER PHILHARMONIE

1997年	開演時間	都市	会場	主催	プログラム
1月24日[金] Jan.24th (Fri.)	18:30	東京 Tokyo	東京芸術劇場 Tokyo Metropolitan Art Space	ジャパン・アーツ	J.S.バッハ マタイ受難曲
1月25日[土] Jan.25th (Sat.)	18:00	大阪 Osaka	ザ・シンフォニーホール The Symphony Hall	朝日放送	J.S.バッハ マタイ受難曲
1月26日[日] Jan.26th (Sun.)	14:00	倉敷 Kurashiki	倉敷市民会館 Kurashiki Shimin Kaikan	くらしきコンサート	J.S.バッハ ミサ曲口短調
1月29日[水] Jan.29th (Wed.)	18:30	名古屋 Nagoya	愛知県芸術劇場コンサートホール Aichi Prefectural Art Center Concert Hall	テレビ愛知	J.S.バッハ マタイ受難曲
1月30日[木] Jan.30th (Thu.)	18:30	東京 Tokyo	東京芸術劇場 Tokyo Metropolitan Art Space	ジャパン・アーツ	J.S.バッハ ミサ曲口短調
2月1日[土] Feb.1st (Sat.)	18:00	東京 Tokyo	東京芸術劇場 Tokyo Metropolitan Art Space	ジャパン・アーツ	J.S.バッハ マタイ受難曲
2月2日[日] Feb.2nd (Sun.)	18:30	高崎 Gunma	群馬音楽センター Gunma Music Center	助高崎市文化事業団	J.S.バッハ ミサ曲口短調



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie

ヨハン・セバスティアン・バッハ

マタイ受難曲 BWV 244

Johann Sebastian Bach: Matthäus-Passion BWV 244

[第1曲]

第1曲	「導入合唱」
第2曲～第4b曲	「イエスを殺す計略」
第4c曲～第6曲	「ベタニアで香油を注がれる」
第7曲～第8曲	「ユダ、裏切りを企てる」
第9曲～第13曲	「過ぎ越しの食事をする。主の晩餐」
第14曲～第17曲	「ペトロの離反を予告する」
第18曲～第25曲	「ゲッセマネで祈る」
第26曲～第29曲	「裏切られ、逮捕される」

..... 休憩

[第2部]

第30曲	「導入合唱」
第31曲～第37曲	「最高法院で裁判を受ける」
第38曲～第40曲	「ペトロ、イエスを知らないと言う」
第41曲～第42曲	「ピラトに引き渡される。ユダ、自殺する」
第43曲～第52曲	「ピラトから尋問される。死刑の判決を受ける」
第53曲～第57曲	「兵士から笑いものにされる」
第58曲～第60曲	「十字架につけられる」
第61曲～第65曲	「イエスの死」
第66曲～第68曲	「墓に葬られる」

合唱:ドレスデン聖十字架合唱団
管弦楽:ドレスデン・フィルハーモニー室内管弦楽団
指揮:ローデリッヒ・クライレ
ソプラノ:ハイケ・ハラシュカ
アルト:エリザベート・ヴィルケ
テノール(福音史家):ペーター・シュライヤー
テノール(アリア):マルクス・ブルツァー
バス(キリスト):エグベルト・ユングハンス
バス(アリア):クラウス・メルテンス

ヨハン・セバスティアン・バッハ

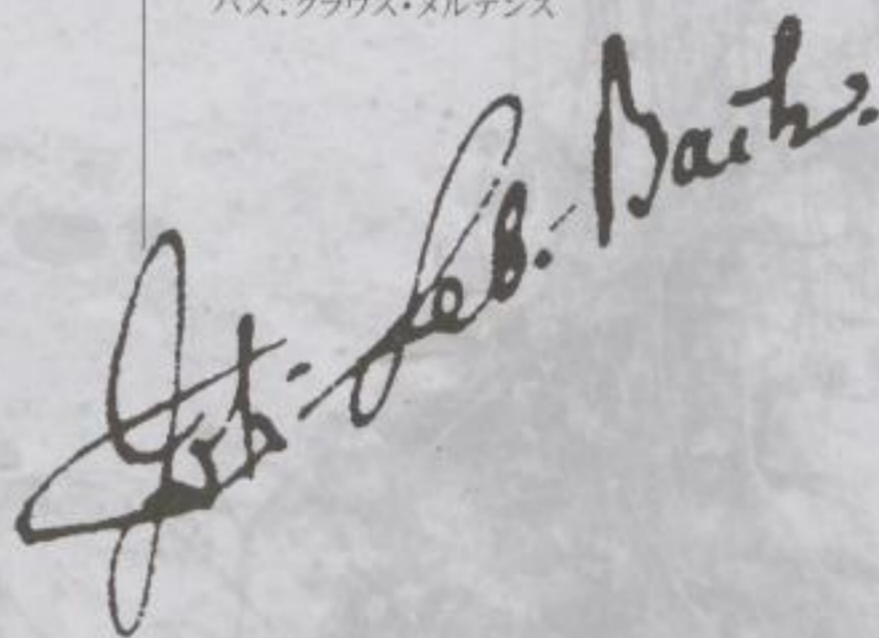
ミサ曲口短調 BWV 232

Johann Sebastian Bach: Messe h-moll BWV 232

(この公演には休憩がございません。)

- I. ミサ
キリエ
グロリア
- II. ニケア信経
- III. サンクトゥス
- IV. オサンナ
ベネディクトゥス
アニュス・デイ
ドナ・ノビス・パチェム

合唱:ドレスデン聖十字架合唱団
管弦楽:ドレスデン・フィルハーモニー室内管弦楽団
指揮:ローデリッヒ・クライレ
ソプラノ:ハイケ・ハラシュカ
アルト:エリザベート・ヴィルケ
テノール:ペーター・シュライヤー
バス:エグベルト・ユングハンス
バス:クラウス・メルテンス



日本語字幕、歌詞対訳
樋口隆一



ドレスデン聖十字架合唱団 Dresdner Kreuzchor

800年もかくにわたる歴史を持つドレスデン聖十字架合唱団は、ドイツの最も古い少年合唱団のひとつに数えられる。当初は、「CAPELLA SANCTAE CRUCIS」、すなわち現在の十字架教会附属のウチン語学校として設立された。聖十字架合唱団は、十字架教会を本拠地として中世の典礼の伝統を今日に伝えている。

ルターやメランクトンなどの偉大な宗教改革者たちに育まれ、ドレスデンの宮廷音楽長でバロックの巨匠ハインリッヒ・シュッツをはじめ数多くの楽長たちが、たえずこの合唱団に心血を注ぎ、大バッハやモーツァルト、そしてゲーテは賛賞を惜しまなかった。

30年戦争、ナポレオン戦争、第一次世界大戦、そして第二次世界大戦の大爆撃を体験しつつも、十字架合唱団はザクセン州の教会音楽と文化的な活動にとって、中心的存在として欠かすことのできない地位を確立している。

また、この合唱団のメンバーからは、カール・リヒター、テオ・アダム、ペーター・シュライヤー等の優れた音楽家が輩出している。

レパートリーは、ハインリッヒ・シュッツの初期バロック作品から、バッハの受難曲、モテット、カンタータ、歴代のカントーレの作品、さらには現代曲まで多岐にわたっており、その他にも民謡やマドリガル、世界の合唱曲をも取り上げている。

聖十字架合唱団は、ドレスデン市が誇る2つの著名なオーケストラである、ドレスデン国立歌劇管弦楽団とドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団と定期的に共演しており、合唱交響曲を歌っている。

この合唱団は、典礼伝統から出発し、そこに根ざしている数少ない合唱団である。毎週日曜日

の礼拝と晩祷は欠かせない活動となっており、地域の教会そして文化活動の中心をなしている。

こうした活動の他、多くのコンサート・ツアーやテレビ、ラジオに出演したり、CDの録音も行なっている。

今世紀にはいってからは、ルドルフ・マウエルスベルガー、マルティン・ブレームに代表される著名



なカントーレによって、典礼の伝統と高い芸術性の高い希な一体化が実現し、ドレスデン聖十字架合唱団は、世界的名声を得ている。

1996年より、現在のロードリッヒ・クワイレがカントーレに就任し(正式就任は1997年1月)、合唱団の指導にあたっている。



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie

ドレスデン・フィルハーモニー室内管弦楽団

Dresdner Kammer Philharmonie

母体であるドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は、1870年に創設された。当時はコンサート・ホールの名前をとって商工会議所管弦楽団と呼ばれていた。貴族社会から、一般市民のための音楽文化が開花した時期で、このオーケストラを中心にドレスデンの450年にわたる音楽の伝統を発展させた。

設立当初から、高い水準を誇り、早くもベテルブルクを始め、アメリカ等諸外国に演奏旅行にでている。

チャイコフスキーは1888年から89年にかけてのシーズンに自作の交響曲第4番で、このオーケストラを指揮し、ドヴォルジャークも自作の交響曲第

5番を指揮した。その他、ブラームス、ハンス・フォン・ビューロー、ザウアー、ヨアヒム、リヒャルト・シュトラウス、ブルーノ・ワルター、ブゾーニ、ラフマニノフ、シュナーベル、サラサーテ、クライスラー、カザルス等々、錚々たる音楽家達が共演した。

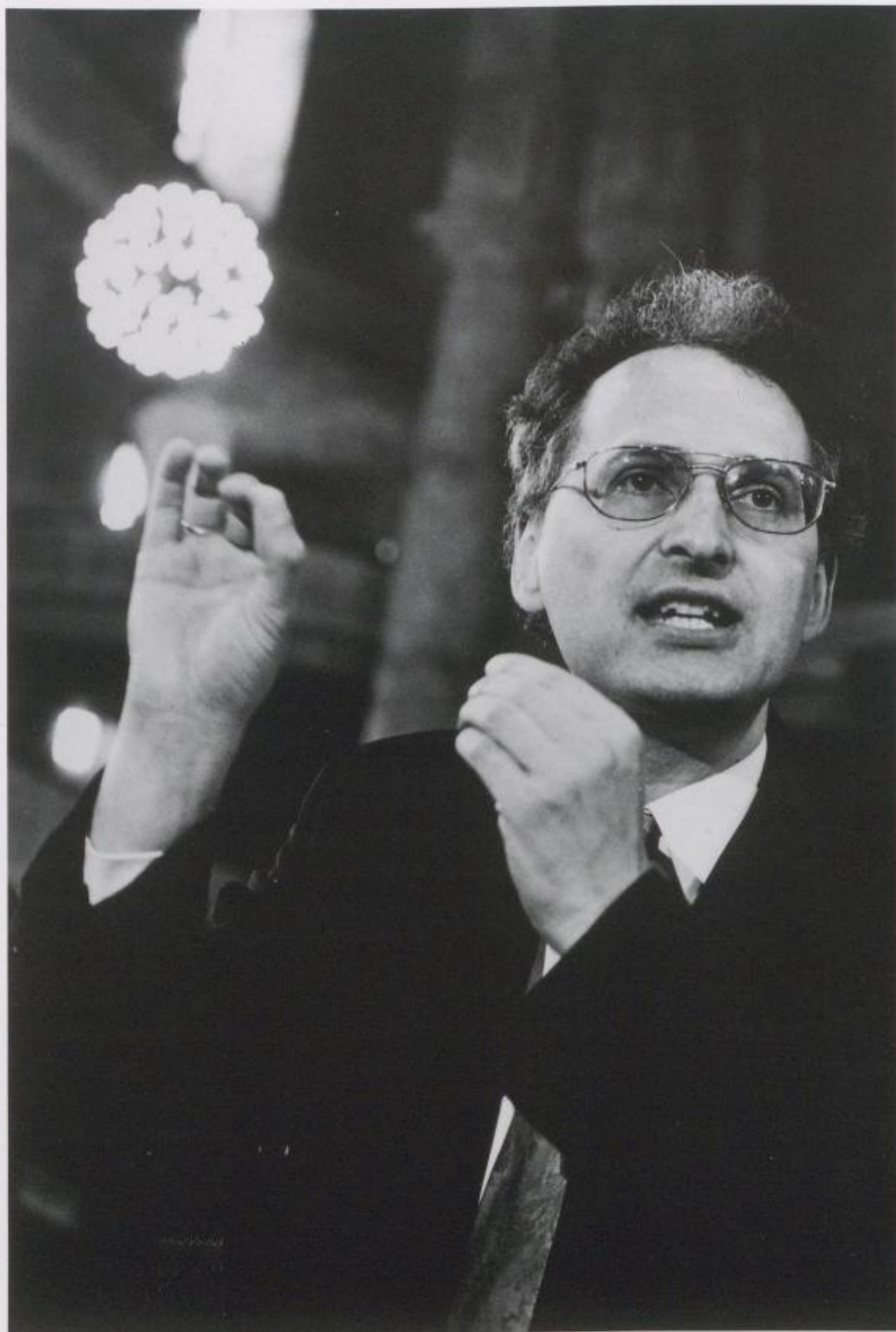
1915年に、指揮者エドウィン・リントナーのもとで、「ドレスデン・フィルハーモニーオーケストラ」となり、24年に現在の名称となった。

1934年にパウル・ファン・ケンペンが首席指揮者を務め、世界的名声を獲得したのが、第一次黄金期である。客演指揮者としては、アルトゥール・ニキシュ、ジークフリート・ワーグナー、マックス・フォン・シリンクス、フリッツ・ブッシュ、エーリッ

ヒ・クライバーなどが指揮台に立った。第2次大戦中の1945年2月13日のドレスデン大空襲によってオーケストラは解散を余儀なくされ、ホール、資料館、そして音楽図書館も失ったにもかかわらず、大戦後すぐに再組織された。1947年には名指揮者ハインツ・ボンガルツが芸術監督に就任し、1964年まで第2の黄金時代を築いた。その後、フェルスター、マズア、ヘルビヒ、ケーゲル、ヴァイクルが首席指揮者を務め、1994年からはミッシェル・プラッソンがその任を引き継いでいる。また、首席客演指揮者としてユーリー・テミルカーノフ、名誉指揮者をクルト・マズアが務めている。



次大戦
によって
レ、資料
ならず、
名指揮
就任し、
その後、
ル、ヴァ
らはミッ
いる。ま
ルカーノ
いる。



ローデリッヒ・クライレ

[指揮者・ドレスデン聖十字架教会カントール]

Prof. Roderich Kreile (Kantor)

1956年生まれ。ミュンヘンで教会音楽および合唱指揮を学ぶ。学生時代からミュンヘン・クリストゥス教会の音楽家として同教会の合唱団とともに、各地で教会音楽活動を行なう。

88年から96年の夏まで、ミュンヘン音楽大学で合唱指導を教え、教授となる。さらに数多くの大学合唱団の指導も行なった。

89年には、バイエルン州が若い音楽家に授与している州奨励賞を受賞。90年に「教会音楽監督」に任命される。さらに94年よりミュンヘン・フィルハーモニー合唱団の指導にも参加するようになり、ゲルト・アルブレヒト、セルジュ・チェリビダッケ、ロリン・マゼール、若杉弘といった著名な指揮者のアシスタントを務めた。

指揮者、オルガニスト、合唱指導講師としてのツアーも多く、これまでに南アフリカ、台湾、アメリカ合衆国およびヨーロッパ各国を訪れている。



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



ペーター・シュライヤー

[テノール]

Peter Schreier (Tenor)

1935年に旧東ドイツのマイセン近郊のカヴァーニッツで生まれた。教会の合唱指揮者・教師の父親から音楽の手ほどきを受け、8歳の時にドレスデンの名門、聖十字架合唱団に入団し、本格的な音楽教育を受けることになった。合唱団では、アルト・パートを歌い、早くからバッハのオラトリオなどでソロを務めた。

ドレスデン音楽大学では、ヘルマン・ヴィンクラーとヨハネス・ケムターのもとで声楽を、エルンスト・ヒンツェのもとで指揮を、そして合唱指揮をマルティン・フレイミヒのもとで学ぶ。

59年、ベートーヴェンの歌劇「フィデリオ」の囚人役を歌って舞台デビュー。61年にドレスデン国立歌劇場のメンバーとなり、一年後、モーツァルトの歌劇「後宮からの逃走」のベルモンテ役で一躍脚光を浴びるようになった。

以後、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭に加えて、ベルリン・ドイツ歌劇場、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座など世界の検舞台に、次々と登場した。

また、バイエルン州、オーストリア、旧東ドイツより宮廷歌手の称号を授けられた。ウィーン楽友協会名誉会員(88年)、ミュンヘン及びベルリンのアカデミー会員(89年より)であると同時に89年5月よりスウェーデン王立芸術アカデミー会員となる。

旧東ドイツ国民栄誉賞(72、86年)、レオニー・ゾンニック音楽賞(コペンハーゲン、88年)、マグデブルク州都よりゲオルグ・フィリップ・テレマン賞(94年)、ヴァルトブルク賞(94年)を受賞。モーツァルトの作品を長年歌い続けたことに対して「ウィーンのフルート時計賞」を、88年にはバーンスタイン、サヴァリッシュ、アバドに続いてエルンスト・フォン・ジューメンス賞を受賞。

古典派、ロマン派のカンタータ、オラトリオに関しても、幅広いレパートリーを誇っている。また、ザクセン地方に古くから浸透しているプロテスタント教会の聖歌隊の中で育ったその背景から、バッハの作品に対する特別な思い入れがある。

シュライヤーは、79年以降、指揮者としても活躍しており、世界各地でバッハの受難曲や「クリスマス・オラトリオ」を、指揮すると同時に福音史家のパートを歌っている。日本では95年にゲヴァントハウス・バッハ・オーケストラと晋友会合唱団を指揮し、「マタイ受難曲」の福音史家などを歌い、話題を呼んだ。

指揮者としては、ドレスデン・シュターツカペレ、ベルリン・フィル、ウィーン交響楽団、モーツァルテウム管弦楽団、ロスアンジェルス・フィルと共演するなど多忙を極めていく。

生まれ
受け、
的な
歌い、
・ケム
て合
舞台
手後、
脚光
ベルリ
、ミラ
の称号
及び
よりス
音楽賞
トップ・
ルトの
計賞」
エルン
広いレ
ている
ッハの
世界各
と同時
トハウ
難曲」
フィル、
ルス・



ドレスデン聖十字架教会内部



ハイケ・ハラシュカ [ソプラノ]
Heike Hallaschka (Soprano)

ハイケ・ハラシュカは、デトモルトの音楽大学で声楽を学んだ後、ケルンのバーバラ・シュリックに師事。さらにジェシカ・キャッシュ、シュトゥットガルトのバッハアカデミーでは、ノーマン・シェトラ（リート様式）のマスタークラスを受講。

ドレスデン聖十字架教会合唱団、ベルリン交響楽団、ミュンヘン・バッハ・コレギウム、中部ドイツ放送交響楽団と共演するほか、ミットツァッカー、ゲッティンゲン、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン、インスブルック、ラ・シェーズ・ディユ、プレスラウ、トゥールーズ、ボーデンゼーの各地で開催された音楽祭に参加している。

また、五声のソリストアンサンブル「コレギウム・ヴォカーレ・ケルン」の第一ソプラノとして、ミヒャエル・シュナイダー、トン・コープマン、ラルフ・オットーとそれぞれ共演。

1995年の春にメンデルスゾーンの「アタリア」でケルンのフィルハーモニーにデビューする。続いてミュンヘンのグッテンベルク、ブラハ、ブルノでも活躍する。

バッハおよびハイドン作品のほか、ブラームスのレクイエム、オルフのガルミナ・ブラーナ、モーツァルトのハ短調ミサ、メンデルスゾーンの「エリア」、アンドリュウ・ロイド・ウェッパの「レクイエム」が挙げられ、幅広いレパートリーを持っている。



エリザベート・ヴィルケ [アルト]
Elisabeth Wilke (Alto)

エリザベート・ヴィルケはドレスデンに生まれ、ドレスデン音楽大学に学んだ。在学中に既にドレスデン国立歌劇場にデビュー、大学卒業後も同劇場と契約し、今は固定メンバーとして属している。

彼女のオペラのレパートリーにはとりわけ叙情的なメゾソプラノ及びアルトの役が多く、例えばドラベラ、オクタヴィアン、ロジーナといったものである。

コンサート及びオラトリオ歌手として人気が高く、ペーター・シュライヤー、ルードヴィヒ・ギェットラー、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン国立聖歌隊等の著名な指揮者やオーケストラとの共演やドレスデン聖十字架合唱団と定期的に共演している。また、数年前よりドレスデン音楽大学にて教鞭をとっている。

国内外での数々のコンサート活動及び、テレビ、レコード収録により、彼女の名はドイツ国外を越えて知れわたるようになる。日本では1987年ドレスデン聖十字架合唱団とともに「マタイ受難曲」に客演しており、1995年はジュゼッペ・シノーポリ指揮、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団の演奏する「エレクトラ」のコンサート形式による公演にも出演している。



マルクス・ブルツチャー [テノール]
Markus Brutscher (Tenor)

マルクス・ブルツチャーの音楽教育は、レーゲンスブルクとアウグスブルクの各少年合唱団で始まった。

アウグスブルクのレオポルド・モーツァルト・ギムナジウムで声楽を学んだ後、アメリカのマリー=アン・ウェルトマンに師事。現在は、ダーリンのノーマ・シャープ教授に師事している。

学生時代から多様なコンサート活動を行ない、幅広いレパートリーを身に付け、その範囲は、初期バロックから現代作品にまでわたっている。

コンサートやオペラ上演に参加して国内外で活躍。数多くの音楽祭にも参加している。ハノーヴァーでは、パーセルの「アーサー王」、アンズバッハのバッハ週間ではアンドリュウ・パロットの下で「マタイ受難曲」、ザルツブルク音楽祭ではフリードル・ボルニウスの下でモーツァルトの「ハ短調ミサ」にそれぞれ出演。

ザルツブルク音楽祭では、作曲家自身の指揮の下でツェンダーの作品を歌い、ブカレストではオルフのオペラ「月」で語り手を務めた。

こうした活動の録音も多く、ソニー・クラシックス、EMI（マリエンヴェスパー、バッハのマグニフィカト）、カプリッチョ（バッハのロ短調ミサ、ヨハネ受難曲）などから発売されている。



エグベルト・ユングハンス [バス]
Egbert Junghanns (Bass)

ザクセン・エルツ山系のアントンスタール生まれ。
ルドルフ・マウエルスベルガー及び、マルティン・フ
レーミヒが指導していた、ドレスデン聖十字架学校を卒
業した。その後、ドレスデン音楽大学にて、クリス
ティーアーネ・ユングハンス教授に声楽を師事した。

1983年より89年までケムニッツ市立劇場と契約し、
「ジブシー男爵」のホモナイ伯爵、「セヴィリアの理髪
師」のフィガロ、「イル・トロヴァトーレ」のルナ伯爵等で
活躍した。その後もライブツィヒやドレスデン国立歌
劇場にも客演している。

ドヴォルジャーク・コンクール('83)第3位、J.S.バッ
ハコンクール優勝('84)シューマン・コンクール('85)
第2位、ウィーンの声楽コンクールで特別賞を受賞す
るなど、国際コンクールにおける入賞歴も数多い。

録音活動も活発に行っており、エテルナ、ノヴァ、
カプリチオ等で、パウル・クルツバッハのリート作品、ド
レスデン聖十字架合唱団とフィルハーモニーとの共
演でメンデルスゾーンやサン＝サーンスの作品、及び
マズア指揮「ナクソス島のアリアドネ」、ハイティンク指
揮「フィデリオ」、サー・コリン・デイヴィス指揮「魔弾の
射手」、シュライヤー指揮「ヨハネ受難曲」を収録して
いる。

現在は特にコンサート及びリート歌手として国内外
で活躍している。



クラウス・メルテンス [バス]
Klaus Mertens (Bass)

クラウス・メルテンスはニーダーラインのクレーヴェ
に生まれ、声楽をエルゼ・ビショフ・ボルネス教授、ヤ
コブ・シュテンブリ教授(リート、コンサート、オラトリオ)
及びペーター・マスマン教授(オペラ)に師事する。

優秀な成績で大学を卒業直後には、フランス・ブ
リュッヘン、ルネ・ヤコブ、トン・コーブマン、ジギスヴァ
ルド・クイケン、グスタフ・レオンハルトといった著名な
指揮者達と国内外での盛んなコンサート活動を開始
する。

演奏活動はヨーロッパ全土、イスラエル、カナダ、
アメリカ、日本にわたり、数々のCD録音やラジオ及び
テレビ収録のほかにアンスバッハのバッハ週間、バッ
ハフェスト・ベルリン、フランデルン・フェスティバル、ヘ
ンデル・フェスティバル・オックスフォード・フェスティ
バル・エクサン・プロヴァンス、バッハフェスティヴァ
ル・ロスアンジェルス、アルテ・ムジーク・フェスティ
バル・ユートレヒト、ターゲ・アルター・ムジーク・レー
ゲンスブルク等多くの音楽祭にも出演。

また、オラトリオ並びにコンサート作品の分野におけ
る、著名で人気の高い声楽家として知られて
おり、同時にリート、また現代
作曲の(初演も含む)歌手として
も成功を取めている。



ドレスデン聖十字教会合唱団 1997年日本公演メンバー

Dresdner Kreuzchor

●ソプラノ I

アレクサンダー・フェーザルム
セヴェスティアン・スーダー
イェーゾフ・グニヤ
シュテファン・フォン・ヤコブ
クリストフ・ワグナー・マイスター
ゲルハルト・ヒル
レオン・ハルトベック
ティム・デーヴェル
フリードリヒ・ブレイヒ
フレメン・ボツセルマン
マルティン・ローア・フック
マルクス・ケーベル
ニコライ・ベルム
フリーデマン・ヴァルター
ゲオルク・ファンダー
リカルド・ブロー
ヨルギウス・マールカート
クルスティアン・ベルガー

●ソプラノ II

ベンジヤミン・シュテファン
ティル・ノイマイスター
カール・ブレイヒ
フリドリヒ・ベルム
ヘルマン・ハルト・セバスティアン
アルフレート・シュタウ
フリードリヒ・シュタウ
マルクス・ブレンツェン
ヒェンリッヒ・ワグナー
フリーデマン・スコー

ヘンケ・レーマン
アルフレート・フォン・ヤコブ
ヤン・シュテファン
クリストフ・グニヤ
グレンツ・ワグナー
クリスティアン・ファン・スーダー
フィン・デーゼ

●アルト I

マーティン・ハッセル
マーティン・イヴァンツィク
セーン・グロス
マティアス・メンコ
アントン・クラウゼ
シュテファン・ヴァルター
ルッヴィグ・ベック
ローレンツ・ワグナー

●アルト II

クリスティアン・イムゲン
ヤコブ・クリスティアン
マーティン・ブレンツェン
ペーター・ファン・ゼー
マーティン・ドブレフ
フリドリヒ・ベルム
ヘンリッヒ・ワグナー
ロベルト・ザイデル
マーティン・グロト

●テノール I

アレクサンダー・フェーザルム
セヴェスティアン・スーダー
イェーゾフ・グニヤ
シュテファン・フォン・ヤコブ
クリストフ・ワグナー・マイスター
ゲルハルト・ヒル
レオン・ハルトベック
ティム・デーヴェル
フリードリヒ・ブレイヒ
フレメン・ボツセルマン
マルティン・ローア・フック
マルクス・ケーベル
ニコライ・ベルム
フリーデマン・ヴァルター
ゲオルク・ファンダー
リカルド・ブロー
ヨルギウス・マールカート
クルスティアン・ベルガー

●テノール II

マーティン・シュミット
トビアス・ガウマン
グレンツ・ヘンリッヒ
ヤコブ・グレンツ
マーティン・クリングナー
トビアス・グレンツ
フランク・ヴェーグナー

●バス I

ヨルギウス・クルルナー
トビアス・ベルン
ベンジヤミン・シュテファン
シュテファン・ベルン
セバスティアン・ワグナー
アントン・クラウゼ
ヨルギウス・クルルナー

●バス II

クリスティアン・ワグナー
アレクサンダー・ヘンリッヒ
クルスティアン・ワグナー
インゴルフ・ファン・ヤコブ
シュテファン・ファン・ゼー
マーティン・シュタウ
セバスティアン・シュタウ

●ソプラノ I

Alexander Frick
Sébastien Ballet
Igor Garia
Stefan Bärent
Christoph Baummeister
Sören Kähler
Larschard Ritz
Tim Sorenson
Friedrich Vögt
Oliver Bismann
Axel Rothbach
Matthias Köhl
Rita Lohman
Friedemann Walter
Gerrit Fager
Klaus Kuhl
Gerdwin Marler
Christos Berger

●ソプラノ II

Berjamin Stoffe
Til Neumann
Kai Penkler
Matthias Köhl
Philipp Bruns
Bernhard Sebastian
Alwin Mierly
Friedrich Schwanig
Marcus Pfannenstiel
Tobias Margul
Friedemann Ecker

●テノール I

Herr Lehmann
Alwin Mierly
Jan Schale
Christoph Mann
Gerrit Fager
Christos Pfannenstiel
Frits Glasde

●テノール II

Martin Jurek
Axel Groß
Matthias Mierly
Andreas Tarnow
Stefan Weller
Lutz Ritzel
Gerrit Köhl

●バス I

Christos Berger
Jacob Zelenka
Martin Bruns
Peter Vancso
Matthias Köhl
Frank Xaver Nollner
Henrik Lorenz
Robert Seidel
Martin Gähler

●バス II

Christos Berger
Alexander Herold
Christoph Knop
Ingrid Schale
Sören Vancso
Matthias Köhl
Sören Müller

ドレスデン・フィルハーモニー室内管弦楽団 1997年日本公演メンバー

Dresdner Kammer Philharmonie

●第1ヴァイオリン

クルスティアン・ブレンツェン
ハイター・クレーマー
ピーター・フリードリヒ・マラー
クルスティアン・ブレンツェン
ニコライ・コンラート
スルズ・マラー
アレクサンダー・クレーマー
グレンツ・ヘンリッヒ
ハイター・クレーマー
アントン・ベルナー

●第2ヴァイオリン

ピーター・クレーマー
クルスティアン・ブレンツェン
スルズ・マラー
Dr. マティアス・ベック
アントン・ベルナー
コンスタンツェ・マラー
マティアス・ベック
フリードリヒ・マラー

●ヴィオラ

ウルリッヒ・アイヒェン
ペーター・ヒュー
ホルガー・クレーマー
シュテファン・ノイマン
ハンズ・ブルカート・ヘンリッヒ
アントン・ベルナー

●チェロ

ウルリッヒ・アイヒェン
エドワード・クレーマー
トーマス・ヘンリッヒ
ホルガー・クレーマー

●コントラバス

クリストフ・クルル
ペーター・クレーマー
キリアン・ファン・スーダー

●フルート

ホルガー・クレーマー
ベルンハルト・ブルカート
マティアス・ベック
ペーター・クレーマー

●オーボエ

ホルガー・クレーマー
ペーター・クレーマー
クリストフ・クルル
マティアス・ベック

●クラリネット

クリストフ・クルル
マティアス・ベック
ペーター・クレーマー
クリストフ・クルル

●ファゴット

クリストフ・クルル
マティアス・ベック

●トランペット

マティアス・ベック
ホルガー・クレーマー
クリストフ・クルル
マティアス・ベック

●打楽器

アレクサンダー・ペーター

●オルガン

クリストフ・クルル
マティアス・ベック

●チェンバロ

クリストフ・クルル

●ハープ

クリストフ・クルル

●1. Violinen

Karl-Georg Bensch
Hans-Joachim
Siegfried Köpcke
Christoph Lindemann
Erich Conrad
Inger-Nella
Viktor Knop
Gerd Köhl
Hilke Schwanig
Anja Richter

●2. Violinen

Dieter Köpcke
Klaus Fritzsche
Inger-Nella
Dr. Matthias Bertsch
Andreas Herber
Sören Göttsch
Matthias Köpcke
Friedrich Lehmann

●Viola

Ulrich Eichmann
Bernd Müller
Holger Naumann
Sören Naumann
Hans-Dieter Henckel
Andreas Köpcke

●Violoncelli

Ulrich Eichmann
Erich Köpcke
Thomas Diez
Karl-Georg Bensch

●Kontrabaß

Prof. Peter Kraus
Klaus Richter

●Fagott

Klaus Fritzsche
Inger-Nella
Gerd Köhl
Bernd Köpcke

●Oboen

Ulrich Eichmann
Bernd Müller
Holger Naumann
Sören Naumann
Hans-Dieter Henckel
Andreas Köpcke

●Englischhorn

Gerd Köpcke

●Fagott

Michael Lang
Matthias Köpcke

●Horn

Michael Lang
Matthias Köpcke
Gerd Köpcke
Bernd Köpcke

●Trompeten

Michael Lang
Matthias Köpcke
Gerd Köpcke
Bernd Köpcke

●Orgel

Michael-Christoph Köpcke
Christoph Köpcke



曲目解説

樋口 隆一

Ryuichi Higuchi

明治学院大学芸術学科教授

J.S.バッハ マタイ受難曲 BWV 244

●歴史の中の「マタイ受難曲」

《マタイ受難曲》BWV 244にはバッハの全てがあると言っても過言ではない。しかしまた一步後退し、この作品を音楽史の流れの中で俯瞰してみると、これはまた18世紀に至るヨーロッパ音楽の歴史の総括としても捉えうる。

コラール旋律の源泉は遠く中世のグレゴリオ聖歌や民謡の類にも求められるし、精緻な合唱も中世以来の対位法に基づいたポリフォニー音楽の総決算である。合唱とオーケストラをそれぞれ2群に分けた演奏形態はヴェネツィア楽派のコーリ・スベツァーティ(分割合唱)の流れを汲んでいるし、福音史家のレチタティーヴォや心を打つアリアは、16世紀末にギリシャの音楽劇の復興運動としてフィレンツェで案出された〈オペラ〉の様式にほかならない。さらに例えば冒頭合唱における合唱とオーケストラが織りなす壮麗な音の絵巻も、その根底にはバロックの協奏曲の原理が横たわっているのである。まさにこうした多層性こそが、この傑作の尽きせぬ魅力の秘密とも言えるのである。

●その成立をめぐる

《マタイ受難曲》は、1727年4月11日の聖金曜日に中部ドイツの大学町ライプツィヒの聖トマス教会で初演された。歌詞はライプツィヒ時代のバッハがカンタータ詩人ピカンダー(本名はクリスティアン・フリードリヒ・ヘンリーキ)が、新約聖書マタイによる福音書第



J.S.バッハ(1685-1750)

*Job: Sebaste Bach
Dirige Musik
v. Kantor zu
Thoma.*



当時の聖トマス教会内部

26章1節から第27章66節までのイエスの受難に関する章句を軸に、さらに数々のコラールや彼自身による自由詩をちりばめて一編の受難曲としたものである。バッハは《マタイ受難曲》をさらに2年後の1729年の聖金曜日にも再演しているが、じつはここまでは初期稿で、今日上演されることの多い後期稿は1736年3月30日の聖金曜日のために改訂されたものである。バッハはさらに1742年頃にもおそらく聖ニコライ教会で再演しており、その後1743年から1746年頃に再演した形跡もある。

●演奏の歴史

1750年にバッハが世を去ってから、次男のカール・フィリップ・エマヌエル・バッハがしばしばハンブルクで部分的に上演した以外に18世紀後半における全曲上演の記録はない。しかし1829年3月21日、弱冠20歳のメンデルスゾーンがベルリンのジングアカデミーで歴史的な復活上演に成功すると、ドイツ各地で盛んに上演されるようになり、いわゆる〈バッハ・ルネサンス〉の直接の引き金となるのである。すでに同年5月にはフランクフルトで上演されているし、1830年にはブレスラウ、1831年にはシュテットテン(レーヴェ指揮)、1832年にはケーニヒスベルクとカッセル(後者はシュポーア指揮)、1833年にはカッセルとドレスデン、1841年にはライプツィヒ(メンデルスゾーン指揮)、1842年にはミュンヘンと続くのである。この問題をさらに追及すると、この作品は19世紀音楽史における歴史主義の問題ともかかわってくる。音楽史全般、いやヨーロッパ文化全般を理解する鍵となる作品とも言えるのである。

●内容と構成

《マタイ受難曲》は2つの部分からなっており、バッハの時代の礼拝ではその間に説教が行われた。バッハの自筆譜には番号付けも場面区分もないが、新共同訳聖書に準拠した場面区分を行いながら簡単に内容を紹介することにしたい。

〈第1部〉

「導入合唱」第1曲、二重合唱による壮大なプロローグは、シオンの娘たちへの呼びかけとして構成される。彼女たちの花婿にたとえられているのはイエスであり、そのゴルゴダへの道行きと十字架上の死が暗示される。まさに受難曲全体の主題の提示である。

「イエスを殺す計略」第2曲～第4b曲、「祭りの間はやめておこう」というユダヤ教の長老たちの意見は合唱によって伝えられる。イエスは過越の祭におけるみずからの死を予言する。「心から愛するイエスよ」と歌うコラールは、その悲劇に対する信徒の真情の吐露。「ベタニアで香油を注がれる」第4c曲～第6曲、「無駄使いだ」と弟子たちは憤慨するが、イエスはそれを自分の死の準備と結びつける。「ユダ、裏切りを企てる」第7曲～第8曲、ソプラノのアリアがユダの裏切りに対する強い悲しみを表現する。「過ぎ越しの食事をする。主の晩餐」第9～第13曲、弟子たちにパンと葡萄酒が与えられた後のソプラノのアリアはキリスト者の心の喜びを歌う。「ペトロの離反を予告する」第14曲～第17曲、オリーブ山に向かう道すがらのエピソード。受難のコラール「おお、こうべは血と傷にまみれ」が登場する。「ゲッセマネで祈る」第18曲～第25曲、ゲッセマネでのイエスの苦悩は3つのレチタティーヴォに分けられ、それぞれにアリアやコラールによる注釈が加えられる。「裏切られ、逮捕される」第26曲～29曲、イエスの逮捕を描写するソプラノとアルトの二重唱に合唱が緊迫感を添える。コラール「おお、人の汝の大いなる罪に泣け」が感動的に第1部を締めくくる。

〈第2部〉

「導入合唱」第30曲、イエスが連れ去られたことを悲しむシオンの娘にイスラエルの娘たちが同情するというかたちで、第1部との連結をはかる。「最高法院で裁判を受ける」第31曲～第37曲、イエスの忍耐を歌うテノールのレチタティーヴォとアリアを伴奏するヴィオラ・ダ・カンパの音色が魅力的だ。「ペトロ、イエスを知らないと言う」第38曲～第40曲、ペテロも悔恨の涙を歌うアルトのアリアのヴァイオリン助奏が叙情的で美しい。「ピラトに引き渡される。ユダ、自殺する」第41曲～第42曲、「わたしのイエスを返してください」と歌うバスのアリアの技巧的なヴァイオリン助奏も聴きどころだ。「ピラトから尋問される。死刑の判決を受ける」第43曲～第52曲、民衆は極悪人バラバを助

け、イエスを十字架に付けよと叫ぶ。「愛ゆえに」と歌うソプラノのアリアが哀切を極める。「兵士から笑いものにされる」第53曲～第57曲、ゴルゴダへの道行きを飾るのはバスのアリア「来たれ、甘き十字架」。「十字架につけられる」第58曲～第60曲、「ああ、ゴルゴダ」に始まるアルトのレチタティーヴォとアリアが、十字架上のイエスの悲惨を歌う。「イエスの死」第61曲～第65曲、イエスの最期とともに天変地異が起きる。「墓に葬られる」第66曲～68曲、アリマタヤのヨセフや女たちがイエスの亡骸を十字架から降ろし、埋葬する。彼らこどもの静かな告別の辞が合唱へと高まり、最終合唱「われら涙してひざまづき」が深い感動をもって全曲を締めくくる。



「マタイ受難曲」の自筆譜と、
1829年に歴史的な復活上演したメンデルスゾーン

J.S.バッハ ミサ曲口短調 BWV 232

●「ミサ曲口短調」の特殊性

バッハの教会音楽家としての創作活動の総決算として最晩年に作曲されたこの作品は、中世以来の宗教音楽の発展が到達したひとつの頂点を形成する傑作である。長大なミサ曲は独唱、合唱、オーケストラを用いた声楽用のさまざまな可能性を提示しており、その意味で、バッハの声楽用の書法の集大成とも考えられる。

4部分からなる特異な構成は、この巨大な作品の複雑な成立過程に起因している。

そもそも、ローマ・カトリック教会のミサ典礼は、教会暦年を通じて不変の部分である〈通常文〉、さらにそれぞれの祝祭日に応じて内容を異にする〈固有文〉という、ふたつの要素の組み合わせからなっているが、ルネサンス期以来、あまたの作曲家たちはキリエ（あわれみの賛歌）、グロリア（栄光の賛歌）、クレド（信仰宣言）、サンクトゥス（感謝の賛歌）、アニュス・デイ（平和の賛歌）の5つの部分からなる通常文をもとにポリフォニーの楽曲を作曲し〈ミサ曲〉と呼ぶのが常であった。

ところがこの〈ミサ曲口短調〉の場合、たしかにミサ通常文に従ってはいるものの、全体は5部分構成をとらず、「ミサ」（キリエとグロリアからなる）、「ニケア信経」（クレド）、「サンクトゥス」、そして「オサンナ、ベネディクトゥス、アニュス・デイ、ドナ・ノビス・パチェム」という4つの部分から成り立っているのである。現在ベルリンのプロイセン文化財団国立図書館に所蔵されているバッハ自筆の総譜をみると、上述の4部分はそれぞれ独立したタイトル・ページを有しており、全てを包括する総合タイトルは付けられていない。



「ミサ曲口短調」の自筆譜



晩年のバッハ

●その成立をめぐる

こうした特異な構造は、このミサ曲の成立過程を知るによって解明される。バッハはまず第1部の「ミサ」（キリエとグロリア）を、1733年に君主であるザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト2世に献呈している。7月27日付けの献辞によると、バッハはライプツィヒでの窮状を打開するためにザクセン宮廷の官職を願っている。ドレスデンのザクセン州立図書館にはこの献辞と献呈用パート譜が所蔵されている。自筆の総譜は献呈されずに手元に置かれた。総譜の紙質、バッハの筆跡から、作曲されたのもおそらく献呈の直前だったと推定される。当時のバッハはライプツィヒの市当局と抗争中で、そこでの立場を有利に導くために選帝侯の後ろ盾が必要だったのである。しかし彼がザクセンの〈宮廷作曲家〉という名誉ある官職を手に入れるのは、じつに3年後の1736年11月19日のことであったが、残念ながらライプツィヒでのバッハの立場が改善された気配はない。

バッハは最晩年の1748年の8月、ミサ通常文のすべてを含む〈ミサ・トータ（完全ミサ曲）〉の作曲を思い立った。そこで彼は、かつてザクセン選帝侯に献呈したキリエとグロリアからなる〈ミサ曲口短調〉の総譜を取り出し、その後続けることを考えた。こうしてまず「ニケア信経（クレド）」を完成し、つぎにくる「サンクトゥス」には、おそらくライプツィヒに来て2年目の1724年の暮れに作曲し、クリスマス第1祝日の礼拝を飾ったと考えられる「サンクトゥス 二長調」を流用した。しかし本来ミサ通常文のサンクトゥスに属しているオサンナとベネディクトゥスはこの単独曲には欠けていたため、バッハは第4部としてオサンナとベネディクトゥス、さらにミサ通常文の第5部にあたるアニュス・デイとドナ・ノビス・パチェムを書き足し、これらをまとめて第4の部分としたのである。これらすべてが完成したのは、バッハが失明する直前にあたる1749年夏のことであった。

さて、さらに各部分の成立事情を見ていくと、「サン

クトゥス」のみならず、かなりの部分が既成の教会カンタータからの改作であり、さらに2曲も改作の可能性が強いということであったが、最近では例えばジョシュア・リフキンやクラウス・ヘフナーのように、ほとんどの部分を改作とする見方もある。

●構成と内容

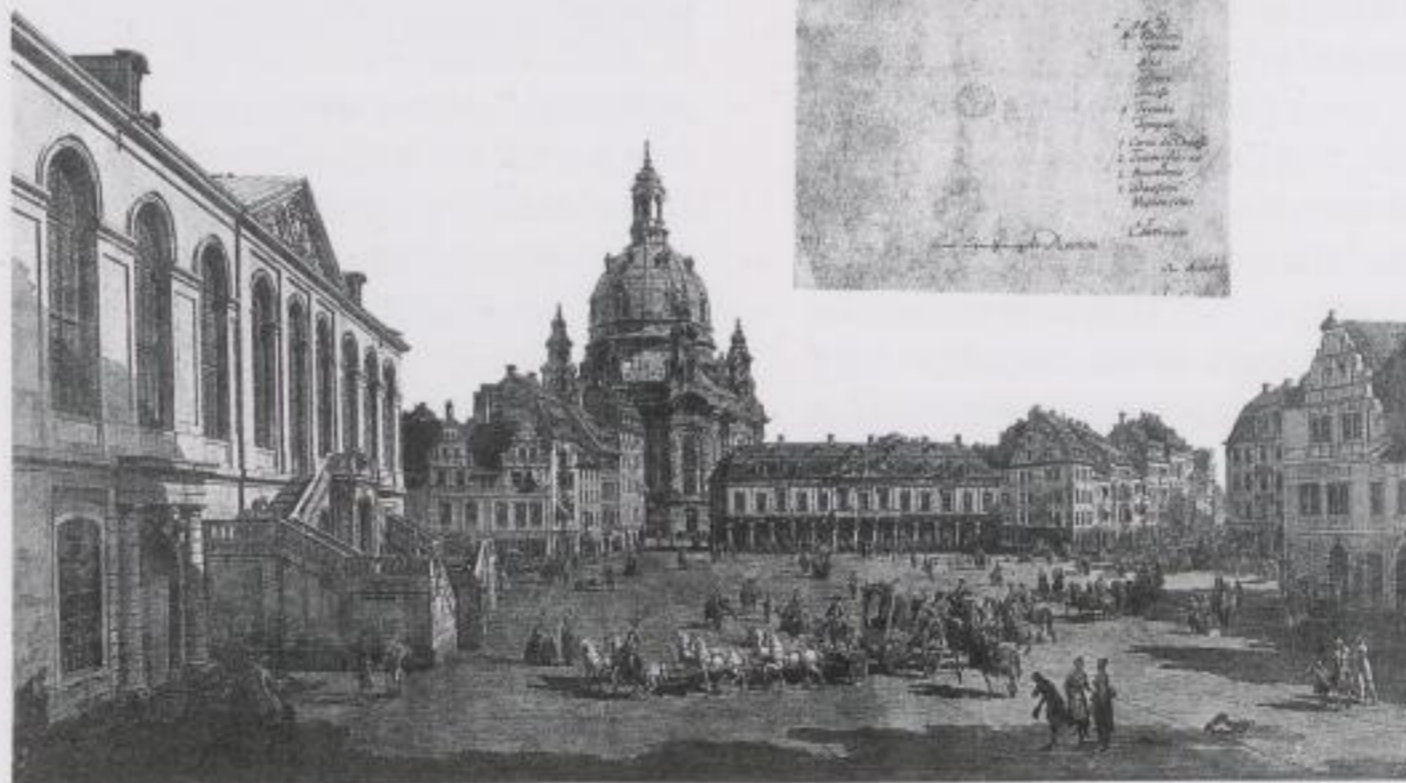
第1部「ミサ」はキリエ(あわれみの賛歌)と「グローリア(栄光の賛歌)」の2部分からなる。「主よ、あわれみたまえ」と叫ぶ感動的な導入部の後、器楽の変奏を経てフーガに入る。二重唱による第2曲「クリステ」は、当時の新しい趣味を反映した優雅なギャラント様式で書かれている。第3曲「キリエ」は古典的な対位法様式の極致である。

「グローリア(栄光の賛歌)」は18世紀の協奏ミサ曲の様式にならい、複数の曲に分かれる。喜びに満ちた8分の3拍子の第4曲「グローリア」と、地上の平和を願う4分の4拍子の第5曲「エト・イン・テラ・パクス」が合唱によって歌われた後、独奏ヴァイオリンに伴われたメゾ・ソプラノのアリア「ラウダムス・テ」が神の賛美を歌う。古様式のポリフォニーによる第7曲「グラツィアス」、ソプラノとテノールの二重唱「ドミネ・デウス」に続く合唱の第9曲「クイ・トリス」はロ短調で、世の罪を除く主への願いを切々と歌う。第10曲はオーボエ・ダモーレの前奏が美しいアリア「クイ・セデス」、続くバスのアリア「クオニアム」ではホルンが活躍する。「精霊とともに」と歌う合唱が、第1部を喜ばしく締めくくる。

第2部「ニケア信経」は10曲からなるが、第15曲の二重唱と第19曲のバスのアリアを除く8曲全てが合唱によって歌われ、信仰を痛切に告白する。中心をなすのはイエスの受肉を歌う第16曲「エト・インカルナトゥス」と、十字架上の受難を歌う第17曲「クルチフィクスス」、そして復活の喜びが爆発する第18曲「エト・レスレクスイト」にほかならない。罪の赦しのための洗礼をしみじみと歌う第20曲「コンフィテオル」のあと、死者のよみがえりを期待する第21曲「エト・エクスベクト」が華麗に第2部を締めくくる。



聖トーマス教会内部にあるバッハの墓



バッハ時代のドレスデン

第3部「サンクトゥス」の合唱は、3たび「聖なるかな」を呼び交わしたというセラピムの声にちなみ、〈3〉という数字と深く結びついている。トランペットもオーボエも3本ずつだし、最後のフーガも8分の3拍子で「主の栄光」を讃えるわけである。

二重合唱の「オサンナ」で始まる第4部では、合唱とアリアが交代する。しみじみとしたテノールのアリア「ベネディクトゥス」ではフルート、胸に迫るアルトのアリア「アニュス・デイ」ではヴァイオリンの変奏が、それぞれの曲の性格を巧みに表現している。平和の願いを歌う最終合唱「ドナ・ノビス・パチェム」の音楽は、第7曲「グラツィアス」のそれとほとんど同じものを用いることによって、このミサ曲の完結性を示しており、トランペットの輝かしい響きが感動的に全ミサ曲を締めくくっている。

「ミサ曲口短調」の原のページ



ドレスデン聖十字架合唱団800年の歴史

菅野浩和

Hirokazu Sugano

音楽評論家

ドレスデンの「聖十字架合唱団」(クロイツコーア)は13世紀の初頭、ドレスデンが都市と呼ばれるようになった時にはすでに創立され、それ以降、今日までのおよそ9世紀近くもの長い間、この都市の栄光、および苦難とともに歩んできたのでした。

いまは点描的にその歴史を辿ってみますと、すでに1485年にこの地に居城を構えたアルベルト家が、1547年にはザクセン選帝侯の地位を得たことによりこの地はザクセン王国の首都となり、時あたかもエルツ山脈の銀鉱山の開発による豊かな財政が背景となって、建築、絵画、音楽の隆盛がもたらされたのでした。シュターツカペレ創立の1548年はほぼこの隆盛期に当たりますが、当時の演奏グループならば小編成で、しかも声楽主体であり、現在のシンフォニー・オーケストラのような大型器楽団体ではありません。

一方聖十字架合唱団に目を向けますと、13世紀以降この合唱団にかかわった歴代の音楽家中、最高の大家であったシュッツ(1585-1672)が、ドレスデン宮廷の楽長に就いて、この聖歌隊にも臨むようになったのが1617年で、それから45年もの長い間、その燃えるような、溢れるような信仰と音楽への情熱をこの合唱団に注ぎ、反映させたのでした。

ここでドイツの歴史を語るにあいに、大きな悲劇として記さなければならないのが30年戦争(1618-48年)です。いま記したシュッツが聖十字架合唱団の指揮をも含むドレスデンの地位に就いた年の翌年にこの戦争がはじまりました。戦争の初期にはドレスデンは大きな影響を受けなかったものの、やがてその進展によってさまざまな打撃を受けるようになります。この戦争がドイツをいかに荒廃させたかは、1648年の

ハインリッヒ・シュッツ



ルドルフ・マウエルスベルガー



マルティン・フレーミヒ



1880年頃のドレスデン(写真)

終戦時にはドイツの人口は戦前の4割にも達しなかったことから考えても、どんなに深刻なものだったかが分ります。加えてシュッツは君主との確執もあり、一時は3回にもわたってデンマーク王のクリスティアン四世の、コペンハーゲン宮廷に逃避的な時期をも過ごしていたのでした。

この悲惨な30年戦争の時期には聖十字架合唱団の活動にも幾多の困難が生じ、一方では宮廷楽団は編成が縮小されます。こうした苦しい時代に、シュッツは「十字架上の七つの言葉」と「宗教的合唱曲集」といった、比類のない内面的な名作によって、暗黒の淵から発する魂の叫びを合唱の響きに託して、ドレスデンの人々の絶望の想いに光を灯したのでした。

やがて30年戦争の傷跡もすこしずつ見え、半世紀ほど経って名君アウグスト一世(在位1694-1733)の時代になりますと、ドレスデンはザクセン・ポーランド

王国(1697年にポーランド国王も兼ねることになったため)の首都としておおいに栄え、彼とその息子のアウグスト二世の時代にかけてツヴィンガー宮殿をはじめ、この都市をヨーロッパで最も美しいバロック都市といわしめる名建築のいくつもが成り、絵画、磁器、音楽の大繁栄を見るにいたります。

しかしつぎの悲劇は七年戦争(1756-63)です。ここでオーストリア側についたドレスデン宮廷はプロイセンに敗れてポーランド王位を失い、大きな打撃を受け、聖十字架教会も破壊されたのでした。しかしその後のアウグスト三世(在位1750-1827)の時代の工業化促進によって、財政的な余裕を得て再び繁栄の時代に入るにいたります。「北のフィレンツェ」、あるいは「エルベ河畔のフィレンツェ」と呼ばれて、「南の」もしくは「アルノ河沿いの」フィレンツェの芸術都市にたとえられるしばらくの間、すくなくとも第二次世界大戦

末期の大破壊までは、この都市は世界有数の芸術、文化都市として知られたのでした。

音楽のうえではいち早く先進国イタリアを受け入れ、倣い、商業都市ライプツィヒの傾向とはあきらかに異なる、優雅さと奥行を秘めたドレスデン様式を形成していました。そのシンボルの一つは19世紀になってからウェーバーやワグナーの活躍で知られるオペラ、そしてそのオーケストラでもあるシュターツカペレですが、もう一つが聖十字架合唱団で、このほうが歴史がずっと長いだけではなく、繁栄の時代も困難の日々も、市民と同じ時代感覚のもとに、市民の精神的基地にも等しい聖十字架教会での毎日曜日のミサ、土曜日の晩課、それに月1回の、教会暦に応じた選曲の教会コンサートで、市民たちと精神的な交応をつづけてきたのです。

聖十字架教会は第二次世界大戦時の大破壊ばかりでなく、それ以前の、すでに記した七年戦争での破壊を併せ考え、そのうえに30年戦争の夥しい人的被害とひどい疲弊にまで想いを及ぼしますと、市民とともに、たいへんな苦難の歴史を歩みつづけてきたことが分ります。

それらの受難のうちで、その深刻さにおいて特記されなければならないのが、第二次大戦下の、空襲によるこの都市の殲滅的大破壊についてです。戦争の狂気による一般都市破壊の最も大きくおぞましい3つの中に数えられる1945年2月13、14両日の、主に米(英も加わる)空軍による、市民と芸術の都市ドレスデンに加えられた、まさに悪魔の行為に等しい大破壊は、すでにナチスの抵抗力がもうほとんど残っていない時期に、軍事目標ではない一般都市(そして芸術的古都)に対して加えられた、意味不明の、憎むべき大悪行でした。このときの一般市民の犠牲者数25万人といいますが、その後の広島でのその3倍以上に上りますし、失われた名建築のかずかずゆえに、この都市の復興はもはや不可能と判断されたのでした。

このアメリカ主体の悪魔的巨大大破壊のドレスデンの受難の時代を通して、聖十字架合唱団のカントルの任に在ったのは、シュッツ以降の名カントルとして今日でもその名が讃えられているマウエルスベルガー(1889-1971、カントルとして1930-71年)でした。彼の名は、今日では何点かのディスクと合唱作品で知られていますが、41才の年から実に41年間もこの名門聖歌隊に、その溢れんばかりの人間性、精神性、音楽性をすべて注ぎ、捧げた、この世界でも稀有の高潔な大家でした。この在任中に、前記の狂気の

大破壊があり、合唱団関係にもたくさんの悲劇がもたらされました。そして全く光の見えないほどの絶望の淵に叩き落されたドレスデンにおいて、団員たちと苦しい手探りで見えない光を信じ、期待し、努め、励んで、教会の再建、都市の復興、絶望の人々の心への癒やし、励ましを行ってきたのでした。

やがて時代が降って1971年に、このあまりにも偉大なマウエルスベルガーを失ったとき合唱団の悲嘆と困惑ははかり知れなかったのです。しかしここに大きな恵みが興えられました。後任のマルティン・フレーミヒは就任時に58才の円熟期にあり、慈父のような抱擁力の大きさと、なによりもドレスデンの人々の心に適うシュッツの精神と音楽語法を根幹に据えた音楽性によって、マウエルスベルガーを失って途方にくれていた合唱団を惣ちつかみ、マウエルスベルガー時代の充実期につづいて、もうひとつの繁栄期を作り、およそ20年の安定した歴史を支えました。

しかしこの合唱団を取り巻く環境は、決して平穏なものではなかったのです。共産主義陣営に組み入れられたドレスデンは、曾って宮廷都市であり、芸術の都であった特徴とは相い容れなかったことは言うまでもありません。宗教施設のうち、有名なものは都市の歴史的、観光的名所扱いにされて、一定の活動は認められはしたものの、政治以上に人々の心と結びつくことは警戒されていたために、共産主義下の聖十字架教会、そして付属の合唱団、その中心人物のカントルには、外部にははかり知れないさまざまな苦勞があったことと思われま。

しかし他の諸都市にくらべて、時代による体制への順応にすばやい人々がそう多くなかったこの歴史と芸術の重味を持つ伝統の古都の市民たちは、聖十字架合唱団が歌う聖歌を、ミサ以外においても一切の拍手なしで、ひたすら心に深く、深くしみこませ、時には眼頭を押えながら聞いて、精神の糧にしていたのでした。私がこの合唱団をはじめて聞いたのは、惜しくもマウエルスベルガー最後の年に一年遅れた1972年でしたが、あのときの新任のフレーミヒの指揮する合唱団の聖歌には、マウエルスベルガーの精神も、音楽性も濃厚に残っており、それが後任のフレーミヒという大ベテランに受けつがれて、新しい生命を得たように感じられました。あの時教会を満たしていた市民たち(当時のドレスデンは、観光客は甚だ少なかった)は、さながら、干天の慈雨を貧り、受けるように聞き、その心と一つになって、もちろん終了後の拍手もなく、終ってからは暗い夜道を、破壊の傷跡の

ぶざまなたくさんの建物を見ながら、いま聴いた至高の調べの福音に浸り、物質的に困難な場と時ゆえの、心の糧の大きさ、すばらしさに深く想いがいたったのでした。

その後2回の来日、'79年と'88年、もちろんフレーミヒに率いられてですが、東京でのコンサートでの感銘もその上に重なります。ところがやがてドイツ、そして世界は、大きな変動に見舞われ、この合唱団も、名師フレーミヒの時代を終らなければならなくなります。

1990年の両ドイツの統一は、たしかに悲願の達成ながら、経済上、体制上をはじめ、たくさんのむずかしい課題に直面せざるを得なくなりました。聖十字架合唱団は時代の変革に伴うさまざまな困難に加えて、20年に及んだ慈父のようなフレーミヒの時代を1991年に終り、その後任にふさわしい人を求めめぐねるといふ、内的な危機に立たされました。

フレーミヒの後任として1992年にカントルに就いたゴットハルト・シュティア(1938-)はマグデブルクの出身。ライプツィヒで学んだバス・バリトン歌手で、聖十字架合唱団の初回の来日時にソリストの一員として来日しているほか、1975年の、ライプツィヒのトマノ・コアともわが国を訪れています。しかし彼はある問題ゆえ、1994年に解任され、その後およそ2年間は、カントル空位で、マティアス・ユングなる指揮者がつとめ、1996年6月に、ようやくローデリッヒ・クライルがカントルとして迎えらるることになりました。正式就任は1997年1月ですので、その新体制早々の来日となります。ミュンヘンで生れ、活躍してきた新カントルは、40才の中堅であり、新時代の聖十字架合唱団に新しい生命力を興えることが期待されます。一方ではフレーミヒの薫陶がまだ生きているその堂々たる基盤、そして至高の指導者だったマウエルスベルガーの訓育時代にこの合唱団にいた世紀の名歌手シュライヤーの参加も今度の来日の大きな特色と考えますと、伝統の偉大さと新時代への橋架けのような二つの意義の感じられる今回の聖十字架合唱団3度目の日本公演への期待と感興の高まりは、押さえ難いものです。

[注]: 30年戦争(1618-48年)は、1517年のルター派発足以降の、ドイツにおける旧教(カトリック)とのたびたびの対立、衝突に、旧教側へのスペインの参戦、新教側にはデンマーク、スウェーデン、フランス等の介入により、当初の宗教的対立から飛躍して、政治的、勢力争いの戦争となったもの。ザクセンは一時カトリック勢の制圧するところとなったのが、後に新教勢が取り戻しています。ザクセンはじめ、列国の勢力争いのための戦場となったドイツ各地の荒廃は、当時の傭兵の編成の低下と衛生状態の悪化ゆえの、飢饉、疫病、悪疫の流行などにより、深甚な被害を受けたのでした。いちばん激しい戦場となった地域では、この戦争によって1割の人口を失ったところさえあったのでした。

バッハとドレスデン

——エルベ河畔の宮都に憧れたプライセ河畔のカントールの物語

加藤 浩子

Hiroko Kato

音楽学

ドレスデンに行くなら、列車がいい。
駅に着く直前にエルベ河をわたるのだが、これがいいのである。

列車が進むにつれ、車窓の遠くに見えていた堂塔の群れが、みるみるうちに迫ってくる。その圧倒的なたたずまいは、町に踏み出す前から、古都を訪れるという陶醉に、うむをいわず引き込んでくれるだろう。

だがこの町が歩いてきた歴史は、決して平坦なものではなかった。

第二次大戦の終わる年の冬には、有名な空襲で町のほとんどが灰となり、歴史的な建物の大半が失われたし(現在の華麗な景観は、だからほとんどが戦後になって復元されたものである)その後「東」側に組み込まれていた時代には、あの国を覆っていた荒涼と、ドレスデンもまた無縁ではなかった。

「ベルリンの壁」がまだ厳然とそびえていた1988年に、はじめてドレスデンを訪れた時の印象は、まだあざやかに脳裏にこびりついている。

かつての王宮の跡は、崩れ落ちた煉瓦と、ただけしく生い茂る野草のはびこる廃墟と化していたし、ひび割れの目立つ道路の両側には、風雨に痛めつけられるまま、陽灼けあとの剥けた皮膚のような外壁をさらした建物が連なっていた。建物の切れた所には、しらちゃけた土と枯色の雑草ばかりが目につく空き地が虚ろな口を開けていて、いたたまれなくなることもしばしばだった。行列をしたあげくにカフェに入れば、なまぬるいジンジャーエールかビールしかないと言われ、資料を調べに訪れた図書館の食堂では、口に入るものといえば黒パンと水しか残っていなかった。固く酸味の強いパンを食いちぎるように口に入

れ、けばだった泡が喉を刺すミネラルウォーターで流し込んだことを覚えている。

それでもドレスデンには、他の「東」の都市にはないはなやかさがあった。

再建されたツヴィンガー宮殿も、美術館も、美しい色や形にあふれていたし、エルベ河を見下ろす高台からは、河の面に照り返る陽の光を受けてきらめく聖堂や劇場の屋根を見はるかすことができた。河をわたる風のなかを、西側からの観光客にまじってたゆたっていると、図書館の一室で、微の臭いのしみつい



ツヴィンガー宮殿

た資料に囲まれて過ごした後の乾いた疲労感が、ゆっくりといやされてゆくのがあった。

はげしい戦火や、共産主義政権という試練にさらされながらも、典雅な空気をうしなわなかったドレスデン。その空気をはぐくんだ第一の功績は、バッハと同じ時代に生きていた人々にある。

18世紀のドイツは、およそ300の国々に分かれていたが、ドレスデンに宮廷をおくザクセン選帝侯国は、なかでも屈指の強国だった。1694年に選帝侯に即位したアウグスト「強王」こと、フリードリヒ・アウグスト1世

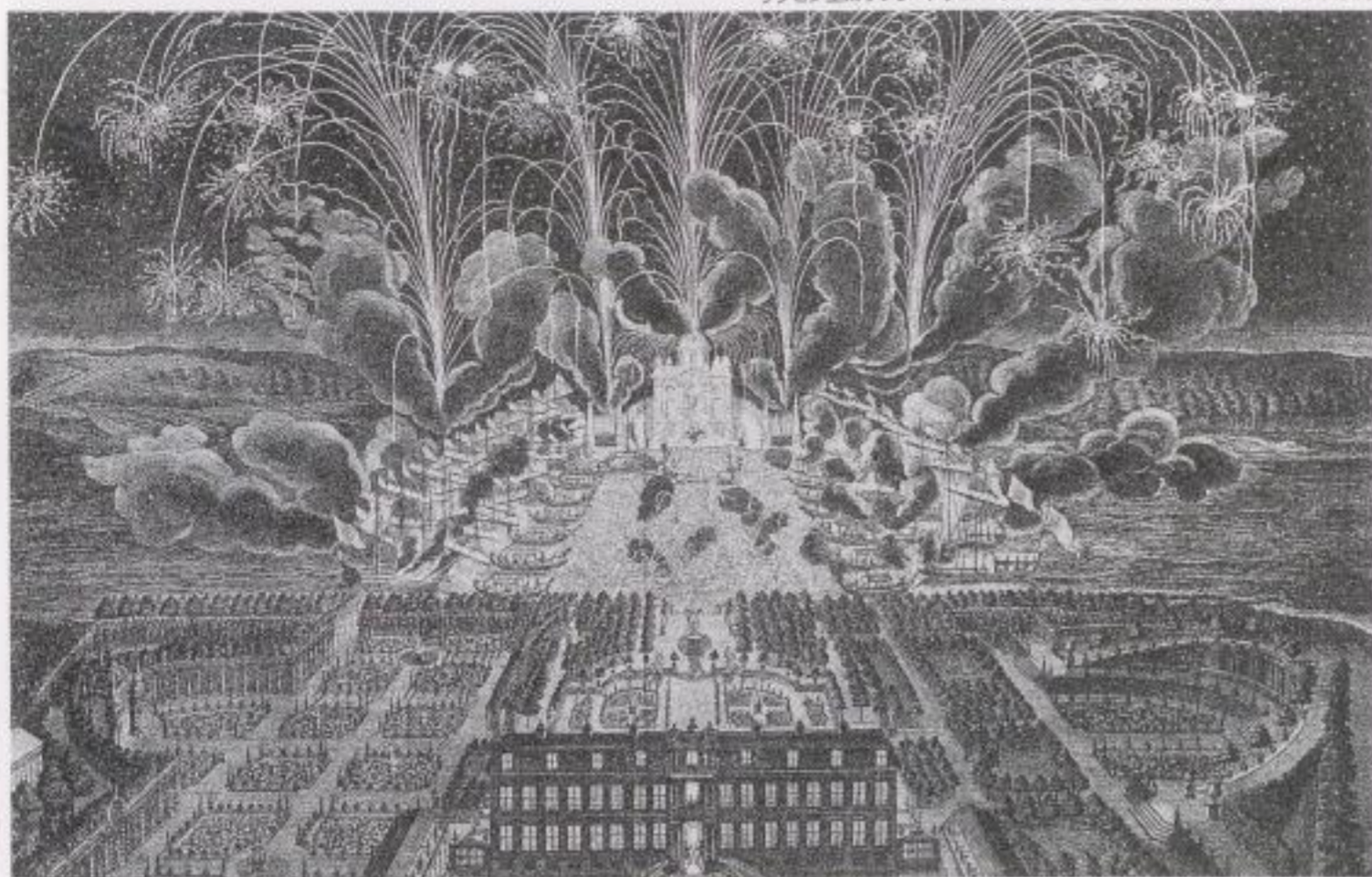
は、3年後の1697年にはポーランド国王となり、2つの国を傘下におさめるにいたる。ポーランドの王冠は、ザクセン選帝侯家の長年の夢でもあった。アウグスト強王は、ザクセンの国教であったルター派からカトリックに改宗してまで、その王冠に固執したのだった。

生粋のルター派だった侯妃との不仲など、改宗の余波はあったものの、以後の半世紀余り、ドレスデンは未曾有の黄金時代を迎える。そしてその繁栄は、そのまま音楽生活にも投影されることになった。

絶対王権はなやかなりしこの時代にあっては、およそ芸術と呼ばれるものは、支配者を演出するための道具にほかならなかつた。豪華な劇場やすぐれた宮廷楽団、結婚式で上演される大がかりなオペラ、飾り立てた山車がえんえんと連なる謝肉祭のパレードは、そのまま君主の権力の象徴であった。

アウグスト強王は、専制君主の頂点だった太陽王ことフランスのルイ14世を手本に、せつせと芸術の育成に励んだ。ツヴィンガー宮殿もオペラハウスも、彼の時代に完成したし、いまやドレスデンとワルシャワの2か所の宮廷に仕事をもつようになった宮廷楽団は、ピゼンテルをはじめ当代一流の奏者を大勢抱える、ヨーロッパでも指折りの楽団へと成長した。1719年に「強王」の息子が神聖ローマ皇帝の娘と結婚した時には、オペラにバレエ、芝居にセレナータといった催しが、1か月ちかくにわたって手を変え品を変えてつづけられたのである。

生涯の大半をザクセンで送ったバッハにとって、贅をきわめた宮都ドレスデンは、ひとつの憧れであったにちがいない。だがその憧れは、どうやらあまり報いられることなく終わったようである。



記録で知られているかぎり、バッハとドレスデンとの関係は、ある華麗な伝説にはじまる。フランス生まれのオルガンの名手マルシャンとの、未然に終わった対決である。やはりすぐれたオルガン奏者として名を馳せていたバッハは、「強王」のおぼえがめでたかったマルシャンと、王の御前でオルガンの腕を競うことになった。ところがバッハの腕前に怖じ気づいたのか、マルシャンは予定された時刻にあらわれることなく、ドレスデンから姿を消してしまったという事件である。バッハの伝記作者であるフォルケルが伝えているこの逸話、いささか英雄伝説のような気味がないでもない(ちなみに1717年当時の記録は見つかっていない)。フォルケルによれば「強王」は、マルシャンをドレスデンの宮廷オルガニストに雇おうと考えていたらしいが、消え失せたマルシャンに代わってバッハを雇おうとはしなかった。

この一件は、その後のバッハとドレスデンとの間柄を暗示しているように思われる。バッハはそれ以降もしばしばドレスデンを訪問し、宮廷や教会でオルガンの腕を披露した。また宮廷楽団の音楽家たちとも親しく交わり、彼らに演奏されることを想定した作品を書いたりもしている。だがバッハが正式にドレスデン宮廷に招かれることは、ついになかったのである。

1733年7月27日、ライプツィヒの聖トーマス教会カントール(教会音楽監督兼教会学校の教師)をつと

めていたバッハは、「強王」の息子で後継者となったフリードリヒ・アウグスト2世に宛て、「宮廷楽団のしかるべき称号」を求める手紙をしたためた。雇主であるライプツィヒの市参事会が、バッハの音楽づくりにいっこうに理解を示さないのに腹を立てた結果の、求職運動であった。この時、選帝侯への忠誠のあかしとして献呈された作品が、《ロ短調ミサ曲》の第一部である。

だがバッハの願いは、なかなか日の目を見なかった。以後の数年間、バッハはドレスデン宮廷に向けて執拗に自分の存在をアピールしつづける。その一例が、自ら率いていた音楽愛好家たちの団体「コレギウム・ムジクム」による「特別コンサート」である。バッハは、選帝侯の誕生日や命名日など、特別な祝いごと



バッハがアウグスト2世に宛てた、請願書



フリードリヒ・アウグスト2世

にあわせてコンサートを聞き、そのために作った新作のカンタータを上演して、選帝侯に捧げた。このようなコンサートは、あらかじめ新聞で予告された。「いともうやうやしき…」などといった美辞麗句を連ねた予告文には、ドレスデンの目を意識するバッハの姿勢がにじみ出ている。また選帝侯がライプツィヒにやってきた折には、侯の滞在している館に面した広場で、何百人という人々が灯火をかかげるなか、バッハのカンタータが彼自身の指揮で演奏されて、選帝侯の就寝前のひとときを楽しませたのだった。

やがてバッハの努力が形になる時が来る。フリードリヒ・アウグスト2世は、1736年11月19日付けて、バッハに「宮廷楽団所属作曲家」の称号を許した。

たんなる称号だけのこの回答が、どれほどバッハの意に沿うものだったのか、教えてくれる資料は残っていない。だがドレスデンに対するバッハの自己宣伝は、この出来事を境にぼったりとやんでしまう。ドレスデンの教会でオルガニストとなっていた長男フリーデマンは別として、バッハ本人とドレスデン宮廷との関係は、これ以上発展することはなかったのである。

バッハがもしドレスデンの宮廷に仕えていたら、そう考えるのは楽しい。優秀な演奏家をそろえた宮廷楽団は、彼の要求に十二分に答えてくれただろうし、花盛りだったイタリア・オペラを作曲する機会にも、恵まれたかもしれないのだ(おなじ宮廷でも、バッハが楽長をつとめていたケーテンのような小宮廷では、金のかかるオペラなど高嶺の花だった)。ドレスデンの街角で、かつての栄華の名残りに出会うたび、この町にバッハが抱いたであろう憧れが、切々と染み渡ってくるのである。

ドレスデン再訪

～聖十字架教会での晩祷と礼拝～

高野 昭夫

Akio Takano

音楽評論家/ルーテル学院大学ルター研究所研究員

中部ドイツ、ザクセン州の首都ドレスデン。その昔、ポーランド王兼ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世の頃には、その栄華ゆえ「エルベのフィレンツェ」と賞讃されザクセン地方の政治・文化・芸術の中心だった都市。フリードリヒ・アウグスト2世が即位した1733年、バッハはミサ曲短調のキリエとグロリアを献呈し、1736年、宮廷作曲家の称号を手に入れている。当時のドレスデン宮廷とは多くの名演奏家、作曲家が在籍しており、ヴァイオリンのピゼンテル、ヴィオラ・ダ・ガンバのアーベル、フルートのクヴァンツ、そして作曲家のツェレンカ等の名をあげる事が出来る。バッハも彼等と交流を持ち、イタリアオペラを聴くため、長男のフリーデマンと共に何度もドレスデンに足を運んだ。その後も、2世紀近くに渡って中部ドイツの中心地として栄えたが、第2次世界大戦の夜間爆撃で3万とも4万とも言われる犠牲者を出し、一夜にして焦土と化した。しかし、戦後すぐに復興が始り、今また昔の栄光を取り戻しつつある。

毎年ライブツィヒの聖トーマス教会でバッハ時代の礼拝学を勉強している私は、滞在中に一度はドレスデンを訪れる。何故なら聖十字架教会での土曜日の晩祷と日曜日の礼拝に出席するためである。

今年も私を乗せた特急列車、バッハ号は終点の古色蒼然としたドレスデン中央駅に到着した。正面出口を出るとドレスデンの再開発が急ピッチで進んでいる事に毎年ながら驚かされる。ドイツ統一直後、初めて駅に降り立った時、いかにも古びたレストランが最初に目に入ったのだが今では日本中どこでも見かけるハンバーガーショップに変わっており、駅前通りは新



ドレスデン聖十字架教会

しく舗装され、街の中心にはアメリカ系の高級ホテルが新しく建っていた。見所の一つツヴィンガー宮殿も修復の最中で、街のいたる所、工事中と言う感じがする。ドイツ統一直後の面影はだんだん薄れてゆくうだ。

気を取り直し駅前から中央広場まで真っ直ぐに続いているブラガー通りを歩いてゆく。暫く行くと右手に聖十字架教会のくすんだ建物が見えてくる。

聖十字架教会は現存するドレスデンの教会の中で最も古く、最初は聖ニコラウス教会として1206年に



本郷地で歌う聖十字架合唱団

創設された。その後1234年に当時の辺境伯ハインリヒが聖遺物(イエス・キリストのかけられた十字架の破片)をこの教会に寄贈した事により14世紀頃から聖十字架教会の名で呼ばれる様になったと言う。1539年宗教改革により、ルター派の教会となり、ドレスデンの中央教会として今日に至っている。今も教区教会監督が在席し、2人の牧師をはじめ教理教師、讃美歌指導教師、オルガニストなど多くの人々が働いている。

教会に入っていくと、ちょうど晩祷が始まる所であった。聖十字架合唱団が出演する事で有名な晩祷(音楽夕礼拝)は隔週土曜日の午後5時から始まる。

ここで聖十字架合唱団について少し述べる事にする。――

聖十字架合唱団はドイツで最も長い歴史と伝統を持つ合唱団である。13世紀、教会が出来て間もなく礼拝に奉仕する合唱団員を育成する必要から聖歌隊学校が設立され、14世紀に入って聖十字架学校と呼ばれる様になった。聖十字架学校は1350年以降、市参事会の管理下に置かれる様になり、在学中の生活費は市が負担し、その見返りとして生徒は教会での祝祭主日の礼拝や諸集会での音楽による奉仕を義務づけられた。これは今にも続く学校の伝統である。現在は教会から少し離れた学校で8歳から18歳までの90名近い生徒が月曜から金曜まで学内の寄宿舎で生活し、一般教科のほか、ルター神学、ラテン語そして音楽実技などの授業と、他の同年代の子供たちと比べ多忙な日々を送っている。――



十字架合唱団



ビリヤードを楽しむ子供たち

聖壇のローソクに火が燈された。これは教会の行事であると言う象徴であり開演の合図である。この集会を楽しみにしているドレスデンの人々も観光客もみな席についた。この日のプログラムは聖十字架教会オルガニストの弾く曲で始まり、牧師の挨拶、そして長くドレスデンで活躍し、現在もルター派教会音楽の父と称賛されているハインリヒ・シュッツの宗教合唱曲集から1曲が聖十字架合唱団によって歌われ、全会衆による讃美歌、ルター派ゆかりの作曲家によるモテット、この日の聖書日課の朗読、牧師の説教、主の祈り、祝福と進み、最後にバッハのモテットが歌われた。曲目は総て、この日と翌日曜日の聖書日課に因んだものが選定されており、この集会が教会にとって重要な行事である事を認識させられる。

プログラムが終了すると、ドレスデンの人々にとって丁度夕食の時間である。集った人々は暖いスープの待つ我が家や市内のレストランへと向う。音楽好きな人々は(私もそうだが)夕食もそこそこにドレスデン国立歌劇場でのオペラへと急ぐのである。

翌日曜日、聖十字架教会での礼拝は、朝9時半から始まる。開始15分前位から教会の鐘が鳴り響き始め、教会に向う私は身も心も引き締まる思いで、自然と足早になる。しかし教会に入ると、聖十字架合唱団は後方の聖歌隊席にきちんと着席していたが、多くの信者の人たちは、まだ席に着かず一週間振りに会った友人、知人たちと挨拶を交したり、おしゃべりに夢中になっている。そうこうしている内にオルガニストによるバッハの前奏曲変ホ長調が始まると信者の人々も漸く席に着き、讃美歌集を開き始める。教会内を見

渡すと集った信者は昨日の集会の半分にも満たない。大体500人位だろうか。出席率は、あまり良くない様だ。牧師が言うにはドレスデンフィルハーモニー管弦楽団が協演し、バッハのクリスマスオラトリオが演奏される降誕祭や、マタイ受難曲が演奏される聖金曜日(イエス・キリストが十字架にかけられた日)、復活祭には定員3500名のこの教会に、観光客も含め、たくさんの人が詰めかけ、通路まで満員になるが、普段の礼拝に来る人はドイツ統一後年々減少しており、この現象はライブツィヒでも同様で教会関係者にとって大きな問題となっている、との事。

聖十字架教会での礼拝は、ザクセン州福音ルター派礼拝規定書に従って執り行われる。この規定書はバッハ時代以前の伝統を今もなお継承しているので、礼拝に出席する事によってバッハの作品の原点に接する事が出来る、と言っても過言ではなからう。ルター派教会では自国語での礼拝が原則なので、総てドイツ語で行われる聖十字架教会の礼拝は、聖十字架合唱団によるモテットに始まり、詩篇歌、グロリアパトリ、キリエ、グロリア、使徒書、ハレルヤ唱、そしてバッハの教会カンタータとも関係深い福音書日課に因んだ讃美歌、福音書、信仰告白(クレド)、説教、応答讃美歌、主の祈り、祝福の順に進んで前半を終える。ちなみに、礼拝に出席している信者は礼拝への参加を義務づけられているので、聖書朗読と説教以外は聖十字架合唱団とともに歌い、唱え、祈らなければならない。礼拝を形成するのは牧師、合唱団、オルガニスト、そして出席している総ての信者なのである。礼拝の後半である聖餐は聖壇のある内陣で行

われる。合唱団の奉仕は前半だけなので年長のメンバーやカントルの姿も見える。聖餐は、キリスト教会の重要な儀式で、序詞、サンクトゥス、ベネディクトゥス、設定辞、アグヌスデイ、配領、感謝の祈り、と進み、最後に祝福と励ましを受けて終了する。

礼拝が終ると、聖壇脇にあるハインリヒ・シュッツ小聖堂に婦人会主催の教会喫茶店が店開きし、信者たちの憩いの場となる。私も顔見知りの牧師と1年振りの再会を喜びあいコーヒーを飲みながら日本での生活や、ライブツィヒでの勉強の進み具合などを話す。その内、オルガニストとカントールもやって来て自然とバッハを中心にした音楽の話しになる。彼等にとってキリスト教国でない日本でバッハの音楽が、どう理解されているか興味があるらしく様々な質問が飛び交い、私も勉強になる。

さて、正午近くなると教会喫茶店も閉店である。信者の人々は昼食を取るためそれぞれの家へと向う。私も牧師たちに来年再び訪問する事を約束し、ライブツィヒに帰る事にする。教会前広場に出ると、彼方にドレスデン最古の聖母教会の修復現場が見える。私は、来年はまた新しくなったドレスデンに会う事が出来るだろう、と思いながら聖十字架教会の正午を告げる鐘の響きのなか、中央駅へと急いだ。





STEINWAY & SONS

スタインウェイ・セレクションセンター、
それはピアノ管理の理想を求めた総合施設。



スタインウェイのハンブルグ工場と直結した空間、スタインウェイ・セレクションセンター。

スタインウェイの日本総代理店として40年間。松尾楽器商会は、単にスタインウェイの販売だけを任されているだけでなく、我が国のすべてのスタインウェイの管理をも任されてきました。その中で当社は、つねに理想の「管理技術」と「管理体制」を追求し続け、その集大成として「スタインウェイ・セレクションセンター」を完成させました。約1,300m²を擁するその施設内の全空間は、スタインウェイにとって理想の温度・湿度でつねに管理されています。その全容は、常時100台以上のスタインウェイをエイジング（落ち着かせる）し、選定まで保管する倉庫部分。入荷したすべてのピアノをチェックし、独自のより厳しい基準で再調整するための調整室。最良の響きを備えた選定室。オーバーホールやハンマー交換のための修理工房。技術者の研修・研鑽のための研修室となっています。

無限の潜在能力をもつスタインウェイ。その力を十分に発揮させるには、
高度なピアノ管理技術が不可欠です。

当社では、全従業員の約2/3を技術者が占め、その全員がスタインウェイのハンブルグ工場
で長期間の研修を受けています。これに加えて当社では、定期的にスタインウェイ社から
トップ技術者を招き、コンサート技術者のための高度な研修会「スタインウェイ・アカデミー」
を開催するなど、つねにピアノ管理技術の向上に努めています。また、スタインウェイ社に
替わって地方の提携技術者のための研修も実施しています。

スタインウェイ・アンド・サンズ日本総代理店 株式会社 松尾楽器商会

本 社 / 〒105 東京都港区芝大門1丁目9番1号 TEL:03-3436-4331 (代)
関西営業所 / 〒651 神戸市中央区磯辺通2丁目2番10号 TEL:078-221-4071 (代)
名古屋事務所 / 〒460 名古屋市中区栄4丁目16番8号栄メンバーズオフィスビル507号 TEL:052-241-3664 (代)

○「スタインウェイ」のカタログをご希望の方は、お気軽にお申し込みください。○お求めやすい長期ローンのお取り扱ひもしております。

スタインウェイの驚異的な寿命を末永く保つために。

長年使用されたスタインウェイのオーバーホールやハンマー交換などを行う、専門の修理工房。そこでは、スタインウェイを熟知した専属の技術者によって、スタインウェイの工場や支店と同等の技術でリペアを実施。驚異的な寿命を誇るスタインウェイを再び最良の状態に蘇らせます。



世界が認めた管理技術をあなたのスタインウェイにも。

当社の技術者は世界のトップアーティストが指名する東京文化会館、サントリーホール、シンフォニーホールなどでピアニスト達の高度な要求にきてきました。その結果として、当社の技術はさらに高められ、広く世界に認められるに至りました。スタインウェイは、アップライト・ピアノからコンサートグランド・ピアノまで、同じ工場、同じ職人により、同じ素材で、同じ思想のもとに創られています。ピアノ管理も当然同じであると考える当社では、ご家庭のアップライト・ピアノも、著名ホールのコンサートグランド・ピアノも同じ技術者が管理に当たっています。世界のトップアーティストに鍛えられ、認められたピアノ管理技術は、あなたのスタインウェイにも注がれているのです。



※スタインウェイおよびスタインウェイ&サンズは、
スタインウェイ&サンズ社の登録商標です。

ひとつまたひとつ星がまたたき始めるように、
劇場やオペラハウスに灯がともる。
いい街にはいい音楽がある。

クラシック音楽のふるさとへ、
ルフトハンザがおつれします。

競いあうように、街々にオペラ劇場やホールがある。由緒あるオーケストラがいて、いふし銀の演奏を聞かせてくれる。北へ、南へ、クラシック音楽のふるさと・ヨーロッパを巡って歩く旅がすてきです。東京から週8便、大阪から週7便。名古屋からは大阪経由で週2便。計15便。ルフトハンザならスケジュールにあわせてベストの便をお選びになれます。どの便も日本を飛びたらノンストップ、同日午後の到着。ヨーロッパ内の目的地への乗り継ぎもじつにスムーズです。最新鋭機で飛ぶ快適で安全な空の旅。いつまでも心に残る旅をルフトハンザでどうぞ。

●インターネットをご利用の方は、<http://www.lufthansa.co.jp>をごらんください。



Lufthansa

チケットの予約は、旅行代理店でどうぞ。



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



清らかな歌声…。

ドレスデン聖十字架少年合唱団

きよしこの夜/クリスマス合唱曲集

ヨセフよ、わが愛するヨセフ(ヴァルター)
シオンより(ラインベルガー)
愛の予言(ホミイリウス)
いばらの森のマリア(カミンスキ)
来れ来れ、エマヌエル(コダーイ)
御言葉は肉体となり(シュッツ)
祝福の祈り(ラインベルガー)
この日キリストは生まれたまえり(スウェーリンク)
エサイの枝は芽を出し(アレイヤ賛歌)(ブルックナー)
祭りを祝い給え(ウォルトン)

博士たち(コルネリウス)
御子が生まれたもうた(シュッツ)
おお大なる神秘(ブーランク)
おお救い主よ、天をひらけ(ブラムス)
今、船積みの時(グロスナー)
エサイの根より(ディストラ)
聖母賛歌(ブリテン)
山を越えてマリアは行く(エッカルト)
おお大なる神秘(ブーランク)
きよしこの夜(クルーパー)

ドレスデン聖十字架少年合唱団

CD: POCG-1995(デジタル録音) 税込¥3,000(税抜価格¥2,913)
録音: 1996年1,3月 ドレスデン ●4Dオーディオ・レコーディング

ドイツ・グラモフォン ●発売/販売: ポリグラム株式会社



ジャパン・アーツ“夢倶楽部” 夢カード会員募集中!!

ジャパン・アーツ友の会“夢倶楽部”の特典がパワー・アップ!



公演の優先予約や割引サービス、ご招待、ポイント・プレゼントなど
特典をより充実させました。

※ JCBカード会員(カード会費も含め、年会費¥3,787)と一般会員(年会費¥2,500)があります。
JCBカード会員になりますと、毎年の継続手続が不要となります。

会員特典

- チケットの優先予約(予約枚数を限定する公演もあります)
一般発売日に先がけ優先的にチケットの予約ができます。FAXでの予約受付もできます。
- チケットの会員割引サービス(一部、対象外の公演もあります。)
- チケット代金の銀行自動振替(JCBカード会員)
年会費やチケット代が自動引き落としされるので、銀行や郵便局に行く手間が省け振込手数料もかかりません。
- コンサートに御招待
御招待コンサートを年2回実施致します。詳細は別途御案内致します。
- チケットの送料無料サービス
お申し込み頂いたチケットは送料無料で郵送されます。
- プログラムの割引サービス
ジャパン・アーツ友の会カードの提示により公演プログラムを1冊、割引価格で購入できます。
- ポイント・プレゼント
1年間に10枚以上チケットをご購入の方には、1枚につき1ポイント、10枚=10ポイントで1000円分のポイントをプレゼント。
1年間の合計ポイントは、次年度のチケット購入の際ご利用いただけます。
- 会員情報誌「ピアチャーレ」と各種ダイレクトメール・サービス
- 会員のためのイベント開催
A.アーティストとの交流会 B.リハーサルの公開 C.豪華でお得なコンサート・ツアー
- 下記での10%割引サービス
●西村専門店「文房堂」 ●楽譜の「アーツ出版」(通販)
●サクランボー・レーベルのビデオ、CDの発売元「アーツコア」(通販)

詳しくはジャパン・アーツ友の会事務局までお問合せ下さい。

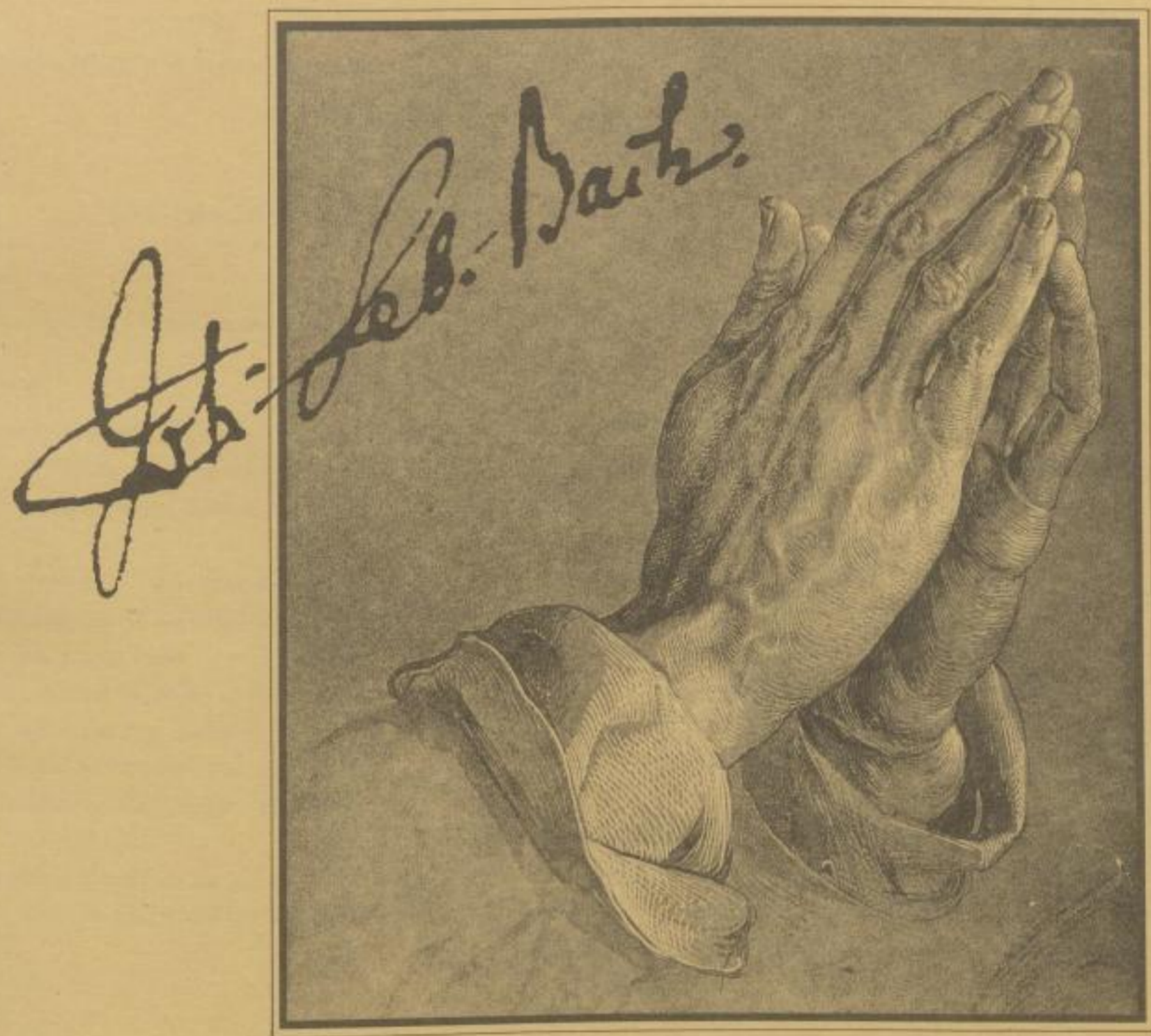
☎ 03-3499-9670

J.S. バッハ
Johann Sebastian Bach

ミサ曲口短調

Messe h-moll BWV 232

歌詞対訳



訳詞：樋口隆一
Ryuichi Higuchi



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie

J.S. Bach MESSE h-moll BWV 232

I. MISSA

KYRIE

1. Chor

Kyrie eleison.

2. Duett (Sopran, Alto)

Christe eleison.

3. Chor

Kyrie eleison.

GLORIA

4. Chor

Gloria in excelsis Deo.

5. Chor

Et in terra pax hominibus bonae voluntatis.

6. Arie (Sopran)

Laudamus te, benedicimus te,
adoramus te, glorificamus te.

7. Chor

Gratias agimus tibi
propter magnam gloriam tuam.

8. Duett (Sopran, Tenor)

Domine Deus, Rex coelestis, Deus Pater om-
nipotens, Domine Fili unigenite, Jesu Christe altis-
sime, Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.

9. Chor

Qui tollis peccata mundi, miserere nobis, qui tollis
peccata mundi, suscipe deprecationem nostram.

J.S.バッハ「ミサ曲 口短調」BWV 232

I. ミサ

キリエ

1. キリエ・エレイソン (合唱)

主よ、あわれみたまえ。

2. クリステ・エレイソン (ソプラノ, アルト)

キリストよ、あわれみたまえ。

3. キリエ・エレイソン (合唱)

主よ、あわれみたまえ。

グロリア

4. グロリア・イン・エクセルシス (合唱)

いと高きところに栄光、神にあれ

5. エト・イン・テラ・バクス (合唱)

地には平和、善意の人々にあれ。

6. ラウダムス・テ (アルト)

われら汝をほめ、われら汝をたたえ。
われら汝をおがみ、われら汝をあがめまつる。

7. グラツィアス (合唱)

われら汝に感謝したてまつる、
汝の大いなる栄光のゆえに。

8. ドミネ・デウス (ソプラノ, テノール)

主なる神、天の王、全能の父なる神よ。
主なる独り子、いと高きイエス・キリスト、
主なる神、神の小羊、父のみ子よ。

9. クイ・トリス・ベカタ・ムンディ (合唱)

世の罪を除きたもう主よ、われらをあわれみたまえ。
世の罪を除きたもう主よ、われらの願いをききいれた
まえ。

10. Arie (Alt)

Qui sedes ad dextram Patris, miserere nobis.

11. Arie (Bass)

Quoniam tu solus sanctus, tu solus Dominus,
tu solus altissimus Jesu Christe.

12. Chor

Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris,
amen.

II. SYMBOLUM NICENUM

13. Chor

Credo in unum Deum.

14. Chor

Credo in unum Deum, Patrem omnipotentem,
factorem coeli et terrae,
visibilium omnium et invisibilium.

15. Duett (Sopran, Alt)

Et in unum Dominum Jesum Christum, Filium De
unigenitum et ex Patre natum ante omnia secula
Deum de Deo, lumen de lumine, Deum verum de
Deo vero, genitum, non factum consubstantialem
Patri, per quem omnia facta sunt. Qui propter nos
homines et propter nostram salutem descendit de
coelis.

(Et incarnatus est de Spiritu Sancto ex Maria vir-
gine, et homo factus est.)

10. クイ・セデス (アルト)

父の右に座したもう主よ、われらをあわれみたまえ。

11. クオニアム (バス)

汝のみひとり聖、汝のみひとり主、
汝のみひとりいと高し、イエス・キリストよ。

12. クム・サンクト・スピリトゥ (合唱)

聖霊とともに、父なる神の栄光のうちに、
アーメン。

II. ニケア信経

13. クレド (合唱)

われは信ず、唯一なる神を。

14. バトレム (合唱)

われは信ず、唯一なる神を、
全能の父、天と地の造り主、
見ゆるものと見えざるものすべての造り主を。

15. エト・イン・ウヌム (ソプラノ、アルト)

われは信ず、唯一なる主、イエス・キリストを、
神のひとり子にして、
よろず世の先に父より生まれたまえる方を、
神よりの神、光よりの光、
まことの神より生まれしまことの神、
父より生れしものにして、造られしものならざれば、
万物の造り主たる父と同一なる方を、
主は、われら人の子のため、
またわれらの救いのため、天より降りたまえり。

16. Chor

Et incarnatus est de Spiritu Sancto ex Maria vir-
gine, et homo factus est.

17. Chor

Crucifixus etiam pro nobis
sub Pontio Pilato,
passus et sepultus est.

18. Chor

Et resurrexit tertia die secundum scripturas, et
ascendit in coelum, sedet ad dexteram Dei Patris,
et iterum venturus est cum gloria judicare vivos et
mortuos, cujus regnion erit finis.

19. Arie (Bass)

Et in Spiritum Sanctum Dominum et vivificantem,
qui ex Patre Filioque procedit; qui cum Patre et
Filio simul adoratur et conglorificatur; qui locutus
est per Prophetas. Et unam sanctam catholicam et
apostolicam ecclesiam.

20. Chor

Confiteor unum baptisma in remissionem peccator-
um. Et expecto resurrectionem mortuorum.

21. Chor

Et expecto resurrectionem mortuorum
et vitam venturi seculi, amen.

16. エト・インカルナトゥス・エスト (合唱)

聖霊によりて、みからだを受け
処女マリアより、人の子となりたまえり。

17. クルチフィクスス (合唱)

されどポンテオ・ピラトのもと、
われらがために十字架につけられ
苦しみを受け、葬られたまえり。

18. エト・レスレクシト (合唱)

聖書にありしごとく三日目によみがえり、
天に昇りて、父なる神の座したもう。
また主は、栄光のうちに再び来たり
生者と死者とを裁きたまい、
その御国の終ることなし。

19. エト・イン・スピリトゥム (バス)

われは信ず、生命を与えたもう主なる聖霊を、
父と子より出でて、父と子とともに
おがみ、あがめられ、
また預言者たちによりて語りたまえり。
一にして聖、公にして使徒継承の教会を、
われは信ず。

20. コンフィテオル (合唱)

われは認む、罪のゆるしのためなる
一なる洗礼を。

21. エト・エクスペクト (合唱)

われは待ち望む、死者のよみがえりを、
また来るべき世の生命を、アーメン。

III. SANCTUS

22. Chor

Sanctus, sanctus, sanctus
Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt coeli et terra gloria ejus.

IV. OSANNA, BENEDICTUS,
AGNUS DEI, DONA NOBIS PACEM

23. Chor

Osanna in excelsis.

24. Arie (Tenor)

Benedictus qui venit in nomine Domini.

25. Chor (da capo)

Osanna in excelsis.

26. Arie (Alt)

Agnus Dei qui tollis peccata mundi,
miserere nobis

27. Chor

Dona nobis pacem.

III. サンクトゥス

22. サンクトゥス (合唱)

聖なるかな、聖なるかな、
万軍の主なる神、
天と地は主の栄光に満つ。

IV. オサンナ、ベネディクトゥス、
アニュス・デイ、ドナ・ノビス・パチェム

23. オサンナ (合唱)

いと高きところにオサンナ。

24. ベネディクトゥス (テノール)

祝福あれ、主の御名によってきたる者に。

25. オサンナ (合唱)

いと高きところにオサンナ。

26. アニュス・デイ (アルト)

神の小羊、世の罪を除きたもう主よ、
われらをあわれみたまえ。

27. ドナ・ノビス・パチェム (合唱)

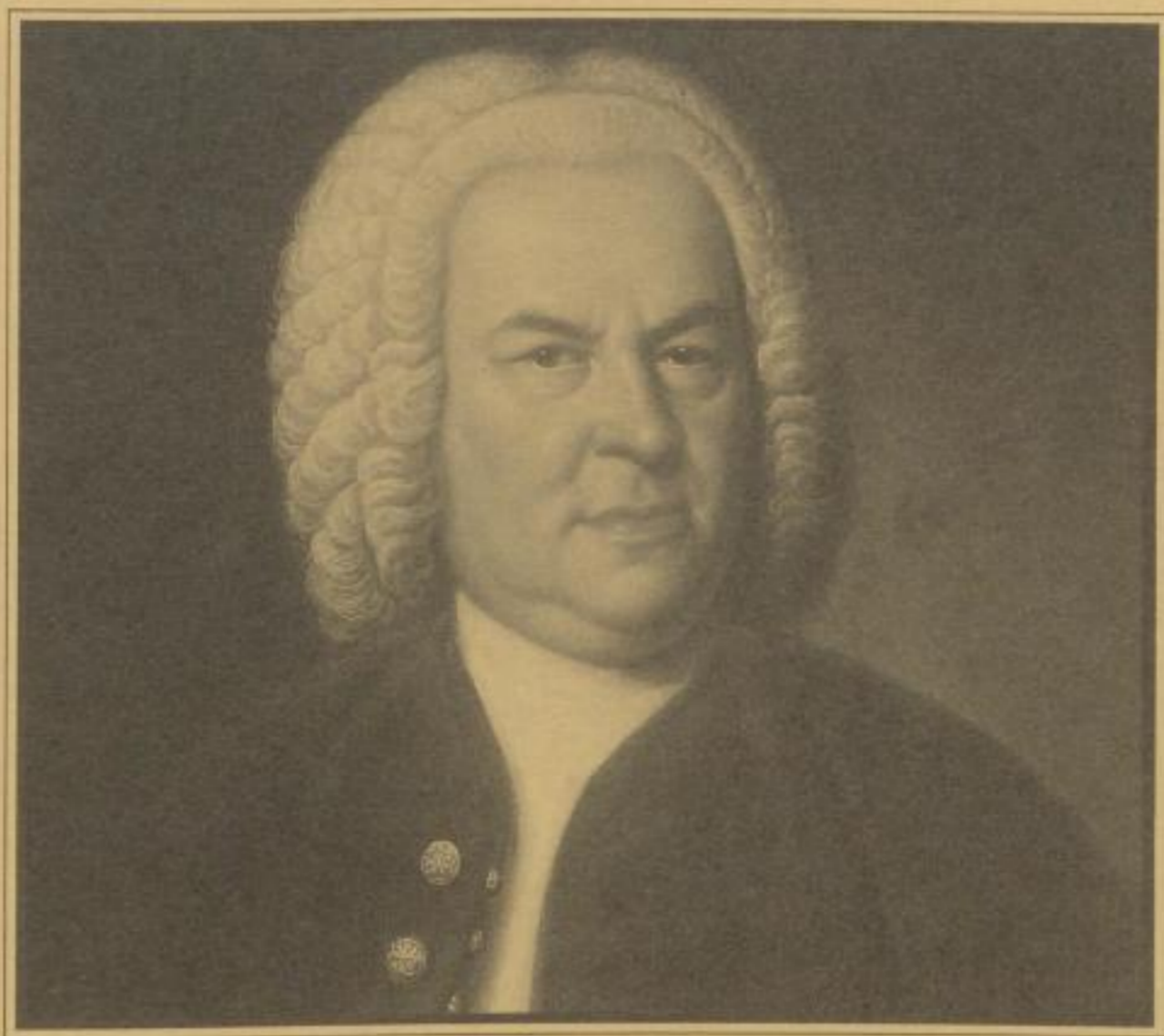
われらに平安を与えたまえ。

J.S. バッハ
Johann Sebastian Bach

マタイ受難曲

Matthäus Passion BWV 244

歌詞対訳



Joh. Seb. Bach.

訳詞：樋口隆一
Ryuichi Higuchi

ERSTER Teil

1. Chor

Kommt, ihr Töchter, helft mir klagen,
Sehet – Wen? – den Bräutigam,
Seht ihn – Wie? – als wie ein Lamm!
O Lamm Gottes, unschuldig
Am Stamm des Kreuzes geschlachtet,
Sehet, – Was? – seht die Geduld,
Allzeit erfunden geduldig,
Wiewohl du warest verachtet.
Seht – Wohin? – auf unsre Schuld;
All Sünd hast du getragen,
Sonst müssten wir verzagen.
Sehet ihn aus Lieb und Huld
Holz zum Kreuze selber tragen!
Erbarm dich unser, o Jesu!

2. Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

Da Jesus diese Rede vollendet hatte, sprach er zu seinen Jüngern:

Bass

Ihr wisset, dass nach zweien Tagen Ostern wird, und des Menschen Sohn wird überantwortet werden, dass er gekreuziget werde.

3. Chor

Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen,
Dass man ein solch scharf Urteil hat gesprochen?
Was ist die Schuld, in was für Missetaten
Bist du geraten?

4.a(4.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Da versammelten sich die Hohenpriester und Schriftgelehrten und die Ältesten im Volk in den Palast des Hohenpriesters, der da hiess Kaiphas, und hielten Rat, wie sie Jesum mit Listen griffen und töteten. Sie sprachen aber:

第1部

1. 合唱

おいで娘たち、共に嘆こう
「ごらんよ」「誰を」「あの花婿を」、
「ごらんよ」「どんな」「まるで子羊のよう」、
おお、神の子羊、罪もなく
十字架につけられたあなたよ、
「ごらんよ」「何を」「あの忍耐を」、
どんなときでもあなたは耐え忍ばれた、
どんな辱めをこうむろうとも、
「ごらんよ」「どこを」「われらの罪を」、
あなたは全ての罪を担われた、
さもなくばわれらの望みは果てよう、
ごらん、愛と慈しみから
ご自身で十字架を背負われるのを、
われらを憐れみたまえ、おお、イエスよ、

[ニコラウス・デチウスによる「アニユス・デイ」Agnus Deiのドイツ語訳 (1529 以前)]

2. レチタティーヴォ (テノール、バス)

テノール (福音史家)

イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると、弟子たちに言われた、

バス (イエス)

「あなたがたも知っているとおりに、二日後は過越祭である、人の子は、十字架につけられるために
引き渡される、」

3. 合唱

心から愛するイエスよ、あなたはどんな罪を犯して、
この厳しい判決を受けられたのか、
その罪とは何か、
どんな悪事に加わられたのか、
[ヨハン・ヘルマン作のコラールの第1節 (1630)]

4. a レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

そのころ、祭司長たちや民の長老たちは、
カイアフアという大祭司の屋敷に集まり、
計略を用いてイエスを捕らえ、殺そうと相談し、このように言った、

4.b(5.) Chor

Ja nicht auf das Fest, auf dass nicht ein Aufruhr werde im Volk.

4.c(6.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Da nun Jesus war zu Bethanien, im Hause Simonis des Aussätzigen, trat zu ihm ein Weib, die hatte ein Glas mit köstlichem Wasser und goss es auf sein Haupt, da er zu Tische sass. Da das seine Jünger sahen, wurden sie unwillig und sprachen:

4.d(7.) Chor

Wozu dienet dieser Unrat? Dieses Wasser hätte mögen teuer verkauft und den Armen gegeben werden.

4.e(B.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

Da das Jesus merket, sprach er zu ihnen:

Bass

Was bekümmert ihr das Weib? Sie hat ein gut Werk an mir getan. Ihr habet allezeit Armen bei euch, mich aber habt ihr nicht allezeit. Dass sie dies Wasser hat auf meinen Leib gegossen, hat sie getan, dass man mich begraben wird. Wahrlich, ich sage euch: Wo dies Evangelium gepredigt wird in der ganzen Welt, da wird man auch sagen zu ihrem Gedächtnis, was sie getan hat.

5.(9.) Rezitativ A.

Du lieber Heiland du,

Wenn deine Jünger töricht streiten,

Dass dieses fromme Weib

Mit Salben deinen Leib

Zum Grabe will bereiten, So lasse mir inzwischen zu,

Von meiner Augen Tränenflüssen

Ein Wasser auf dein Haupt zu giessen!

4. b 合唱

「民衆の中に騒ぎが起こるといけないから、祭りの間はやめておこう。」

4. c レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

さて、イエスがベタニヤで

らい病の人シモンの家におられたとき、一人の女が極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席に着いておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた。弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。

4. d 合唱

「なぜ、こんなむだ遣いをするのか、高く売って、貧しい人々に施すことができたのに。」

4. e レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

イエスはこれを知って言われた。

バス (イエス)

「なぜ、この人を困らせるのか、わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなた方と一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた。はっきり言っておく、世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

5. レチタティーヴォ (アルト)

愛する救い主よ、

あなたの弟子たちは愚かにも、

このやさしい人が香油であなたの体を

葬る準備をするのを責めるのです。

どうかわたしに許してください

この目に溢れる涙の一滴を

あなたの頭の上に注ぐことを。

6.(10.) Arie A.

Buss und Reu

Knirscht das Sündenherz entzwei,
Dass die Tropfen meiner Zähren
Angenehme Spezerei,
Treuer Jesu, dir gebären.⁴

7.(11.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Judas)

Tenor

*Da ging hin der Zwölfen einer, mit Namen Judas Ischarioth,
zu den Hohenpriestern und sprach:*

Bass

Was wollt ihr mir geben? Ich will ihn euch verraten.

Tenor

*Und sie boten ihm dreissig Silberlinge. Und von dem an suchte er Gelegenheit,
dass er ihn verriete.*

8.(12.) Arie S.

Blute nur, du liebes Herz!

Ach! ein Kind, das du erzogen,
Das an deiner Brust gesogen,
Droht den Pfleger zu ermorden,
Denn es ist zur Schlange worden.⁵

9.a(13.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

*Aber am ersten Tage der stissen Brot traten die Jünger zu Jesu und sprachen
zu ihm:*

9.b(14.) Chor

Wo willst du, dass wir dir bereiten, das Osterlamm zu essen?

9.c(15.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

Er sprach:

6.アリア (アルト)

悔い改めの念が

罪の心を千々にさいなむ、

この涙の滴が

好ましい香水となって

イエスよ、あなたに注がれますように

7.レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところに来て言った。

バス (ユダ)

「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか。」

テノール (福音史家)

そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。そのときから、ユダはイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。

8.アリア (ソプラノ)

血を流せ、この心よ、

ああ、あなたが育てた子、

あなたの乳房を吸った子が、

育ての親を殺そうとしている、

その子は蛇になってしまったのだ。

9.aレチタティーヴォ

テノール (福音史家)

除酵祭の第1日に、弟子たちがイエスのところに来て言った。

9.b合唱

「どこに、過越の食事をなさる用意をいたしましょうか。」

9.cレチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

イエスは言われた。

Bass

Gehet hin in die Stadt zu einem und sprach zu ihm: Der Meister lässt dir sagen: Meine Zeit ist hier, ich will bei dir die Ostern halten mit meinen Jüngern.

Tenor

Und die Jünger taten, wie ihnen Jesus befohlen hatte, und bereiteten das Osterlamm. Und am Abend setzte er sich zu Tische mit den Zwölfen. Und da sie assen, sprach er:

Bass

Wahrlich, ich sage euch: Einer unter euch wird mich verraten.

9.d Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Und sie wurden sehr betrübt und huben an, ein jeglicher unter ihnen, und sagten zu ihm:

9.e Chor

Herr, bin ich's?

10.(16.) Chor

*Ich bin's, ich sollte büßen,
An Händen und an Füßen
Gebunden in der Höll.
Die Geisseln und die Banden
Und was du ausgestanden,
Das hat verdient meine Seel.*

11.(17.) Rezitativ T. B. I B. II (Evangelist, Jesus, Judas)

Tenor

Er antwortete und sprach:

Bass I

*Der mit der Hand mit mir in die Schüssel tauchet, der wird mich verraten
Des Menschen Sohn gehet zwar dahin, wie von ihm geschrieben stehet; doch
wehe dem Menschen, durch welchen des Menschen Sohn verraten wird! Es
wäre ihm besser, dass derselbige Mensch noch nie geboren wütre.*

バス (イエス)

「都のあの人のところに行ってこう言いなさい。
「先生が、「わたしの時が近づいた。お宅で弟子たちと一緒に過越の食事をする」と言っています」。

テノール (福音史家)

弟子たちは、イエスに命じられたとおりにして、過越の食事を準備した。夕方になると、イエスは十二人と一緒に食事の席に着かれた。一同が食事をしているとき、イエスは言われた。

バス (イエス)

「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」。

9. d レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

弟子たちは非常に心を痛めて、代わる代わる言い始めた。

9. e 合唱

「主よ、まさかわたしのことでは」。

10. 合唱

わたしこそが悔い改めねばならない、
地獄の業火の中で
両手と両足を縛られて、
鞭と縄目
そしてあなたが耐えたものはみな、
わたしの魂にふさわしい。

[バウル・ゲルハルト作のコラール「おお俗世よ、おまえの生活を見よ」O Welt, sieh hier dein Leben(1647)の第5節]

11. レチタティーヴォ (テノール, バス I, バス II)

テノール (福音史家)

イエスはお答えになった。

バス I (イエス)

「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る。
人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。
だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。
生まれなかった方が、その者のためによかった」。

Tenor

Da antwortete Judas, der ihn verriet, und sprach:

Bass II

Bin ich's, Rabbi?

Tenor

Er sprach zu ihm:

Bass I

Du sagest's.

Tenor

Da sie aber assen, nahm Jesus das Brot, dankete und brach's und gab's den Jüngern und sprach:

Bass I

Nehmet, esset, das ist mein Leib.

Tenor

Und er nahm den Kelch und dankete, gab ihnen den und sprach:

Bass I

Trinket alle daraus, das ist mein Blut des neuen Testaments, welches vergossen wird für viele zur Vergebung der Sünden. Ich sage euch: Ich werde von nun an nicht mehr von diesem Gewölchs des Weinstocks trinken bis an den Tag, da ich's neu trinken werde mit euch in meines Vaters Reich.

12.(18.) Rezitativ S.

Wiewohl mein Herz in Tränen schwimmt,
Dass Jesus von mir Abschied nimmt,
So macht mich doch sein Testament erfreut:
Sein Fleisch und Blut, o Kostbarkeit,
Vermacht es mir in meine Hände.
Wie er es auf der Welt mit denen Seinen
Nicht böse können meinen,
So liebt er sie bis an das Ende.

テノール (福音史家)

イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで言った。

バスII (ユダ)

「主よ、まさかわたしのことでは。」

テノール (福音史家)

イエスは言われた。

バスI (イエス)

「それはあなたの言ったことだ。」

テノール (福音史家)

一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。

バスI (イエス)

「取って食べなさい。これはわたしの体である。」

テノール (福音史家)

また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。

バスI (イエス)

「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」

12. レチタティーヴォ (ソプラノ)

わが心は涙の中に漂う。
イエスが私から別れを告げるから、
しかし遺された御言葉はうれしい。
その肉と血、ああ何と貴いものを。
イエスはわたしの手に遺されたのだろう。
この世におられる時、
従う者たちを慈しんで下さったように、
イエスはこの世の終わりまで愛して下さる。

13.(19.) Arie S.

Ich will dir mein Herze schenken,
Senke dich, mein Heil, hinein!
Ich will mich in dir versenken;
Ist dir gleich die Welt zu klein,
Ei, so sollst du mir allein
Mehr als Welt und Himmel sein.

14.(20.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

*Und da sie den Lobgesang gesprochen hatten, gingen sie hinaus an den Ölberg.
Da sprach Jesus zu ihnen:*

Bass

*In dieser Nacht werdet ihr euch alle ärgern an mir. Denn es stehet geschrieben:
Ich werde den Hirten schlagen, und die Schafe der Herde werden sich
zerstreuen. Wenn ich aber auferstehe, will ich vor euch hingehen in Galilltam*

15.(21.) Chor

Erkenne mich, mein Hüter,
Mein Hirte, nimm mich an!
Von dir, Quell aller Güter,
Ist mir viel Guts getan.
Dein Mund hat mich gelabet
Mit Milch und süsßer Kost,
Dein Geist hat mich begabet
Mit mancher Himmelslust.

16.(22.) Rezitativ T. B. I B. II (Evangelist, Petrus, Jesus)

Tenor

Petrus aber antwortete und sprach zu ihm:

Bass I

*Wenn sie auch alle sich an dir ärgerten, so will ich doch mich nimmermehr
ärgern.*

Tenor

Jesus sprach zu ihm:

13.アリア (ソプラノ)

あなたには、わたしの心を捧げます、
わが救いよ、心の奥に宿りたまえ。
わたしはあなたの内に身を沈めよう、
たとえこの世があなたには小さすぎるとも、
わたしだけにとってあなたは
天にも地にも勝るもの。

14.レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。
そのとき、イエスは弟子たちに言われた。

バス (イエス)

「今夜、あなたがたは皆わたしにつまづく。「わたしは羊飼いを打つ、すると羊の
群は散ってしまう」と書いてあるからだ。しかしわたしは復活した後、あなたが
たより先にガリラヤへ行く」。

15.合唱

われを知りたまえ、わが守り手よ、
わが牧者よ、われを受け入れたまえ。
すべてよいものの源よ、
あなたからわたしはよいものの全てを得ました。
あなたの口は乳と甘い食べ物で
わたしを楽しませ、
あなたの霊はわたしに
天の愉悦を授けて下さいました。
[パウル・ゲルハルト作のゴラーレ「おお、こうべは血と傷にまみれ」O Haupt
voll Blut und Wunden(1656)の第5節]

16.レチタティーヴォ (テノール, バスI, バスII)

テノール (福音史家)

するとペトロが言った。

バスI (ペトロ)

「たとえ、みんながあなたにつまづいても、わたしは決してつまずきません」。

テノール (福音史家)

イエスは言われた。

それを

ために
あなた
ことは

Bass II

Wahrlich, ich sage dir: In dieser Nacht, ehe der Hahn krähet, wirst du mich dreimal verleugnen.

Tenor

Petrus sprach zu ihm:

Bass I

Und wenn ich mit dir sterben müsste, so will ich dich nicht verleugnen.

Tenor

Desgleichen sagten auch alle Jünger.

17.(23.) Chor

Ich will hier bei dir stehen;
Verachte mich doch nicht!
Von dir will ich nicht gehen,
Wenn dir dein Herze bricht.
Wenn dein Herz wird erblassen
Im letzten Todesstoss,
Alsdenn will ich dich fassen
In meinen Arm und Schoss.

18.(24.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

Da kam Jesus mit ihnen zu einem Hofe, der hiess Gethsemane, und sprach zu seinen Jüngern:

Bass

Setzet euch hie, bis dass ich dort hingehe und bete.

Tenor

Und nahm zu sich Petrum und die zweien Söhne Zebedäi und fing an zu trauern und zu zagen. Da sprach Jesus zu ihnen:

Bass

Meine Seele ist betrübt bis an den Tod, bleibet hie und wachet mit mir.

バスII (イエス)

「はっきり言っておく、あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」

テノール (福音史家)

ペトロは言った。

バスI (ペトロ)

「たとえ、と一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」

テノール (福音史家)

弟子たちも皆、同じように言った。

17.合唱

わたしはここであなたのそばにしよう、
どうかわたしを軽べつしないで、
あなたのもとから離れまい、
たとえあなたの心臓が裂けても、
あなたの心臓が
とどめの一突きに果てるなら、
わたしはあなたを抱えよう
この胸とふところで、

[パウル・ゲルハルト作のコラール「おお、こうべは血と傷にまみれ」O Haupt voll Blut und Wunden(1656)の第6節]

18.レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

それから、イエスは弟子たちと一緒にゲッセマネという所に来て言われた。

バス (イエス)

「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい。」

テノール (福音史家)

ペトロおよびゼベタイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして彼らに言われた。

バス (イエス)

「わたしは死ぬばかりに悲しい、ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」

19.(25.) Rezitativ T. und Chor

O Schmerz!

Hier zittert das gequälte Herz;

Wie sinkt es hin, wie bleicht sein Angesicht!

Was ist die Ursach aller solcher Plagen?

Der Richter führt ihn vor Gericht.

Da ist kein Trost, kein Helfer nicht.

Ach! meine Sünden haben dich geschlagen;

Er leidet alle Höllenqualen,

Er soll vor fremden Raub bezahlen.

Ich, ach Herr Jesu, habe dies verschuldet,

Was du erduldet.

Ach, könnte meine Liebe dir,

Mein Heil, dein Zittern und dein Zagen

Vermindern oder helfen tragen,

Wie gerne blieb ich hier!

20.(26.) Arie T. und Chor

Ich will bei meinem Jesu wachen,

So schlafen unsre Sünden ein.

Meinen Tod

Büßet seine Seelennot;

Sein Trauren machet mich voll Freuden.

Drum muss uns sein verdienstlich Leiden

Recht bitter und doch süsse sein.

21.(27.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

Und ging hin ein wenig, fiel nieder auf sein Angesicht und betete und sprach:

Bass

Mein Vater, ist's möglich, so gehe dieser Kelch von mir; doch nicht wie ich will, sondern wie du willst.

19.レチタティーヴォ (テノール) と合唱 (コラール)

なんと痛ましい。

苛まれた心がうち震えている。

身はくずおれ御顔は真っ青だ。

なぜそれほど苦しまれるのか。

裁きの主があの方を裁きの庭に引き出す。

慰めもなく、助ける者もない。

ああ、わたしの罪があなたにふりかかる。

あの方は地獄の責め苦にあわれ。

他人の盗みを償わねばならない。

ああ主イエスよ。

このとがめを受けるべきはわたしなのに。

あなたはその罪を被られる。

[ヨハン・ヘルマン作のコラール「最愛のイエスよ、汝はいかなる罪を犯せしや」
Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen(1630)の第3節]

ああ、わが救いよ。

わたしの愛があなたのおののきとおびえとを和らげ

担い分かち合えるなら。

わたしは喜んでここに留まっていよう。

20.アリア (テノール) と合唱

わたしはイエスのもとで目覚めていよう。

そうすればわれらの罪は眠りにつこう。

あの方の魂の苦しみは

わたしの死をあがない。

その悲しみはわたしに大きな喜びを与える。

だからわれらの救いの力となる受難は

まことに苦く、しかも甘美なのだ。

21.レチタティーヴォ (テノールとバス)

テノール (福音史家)

イエスは少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。

バス (イエス)

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」

22.(28.) Rezitativ B.

Der Heiland fällt vor seinem Vater nieder;
Dadurch erhebt er mich und alle Von unserm Falle
Hinauf zu Gottes Gnade wieder.
Er ist bereit,
Den Kelch, des Todes Bitterkeit Zu trinken,
In welchen Ständen dieser Welt
Gegossen sind und hässlich stinken,
Weil es dem lieben Gott gefällt.

23.(29.) Arie B.

Gerne will ich mich bequemen,
Kreuz und Becher anzunehmen,
Trink ich doch dem Heiland nach.
Denn sein Mund,
Der mit Milch und Honig fließet,
Hat den Grund
Und des Leidens herbe Schmach
Durch den ersten Trunk versüßet.

24.(30.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

Und er kam zu seinen Jüngern und fand sie schlafend und sprach zu ihnen:

Bass

Könnet ihr denn nicht eine Stunde mit mir wachen? Wachtet und betet, dass ihr nicht in Anfechtung fallet! Der Geist ist willig, aber das Fleisch ist schwach.

Tenor

Zum andernmal ging er hin, betete und sprach:

Bass

Mein Vater, ist's nicht möglich, dass dieser Kelch von mir gehe, ich trinke ihn denn, so geschehe dein Wille.

25.(31.) Chor

Was mein Gott will, das g'scheh allzeit,
Sein Will, der ist der beste,
Zu helfen den'n er ist bereit,
Die an ihn gläuben feste.

22. レチタティーヴォ (バス)

救い主は御父の前にひれ伏される。
そして主はわたしとすべての人を墮落の淵から
神の恩恵へと引き上げてくださる。
主は、
死の苦い杯を飲まれるお覚悟である
この世の罪が注がれた
ひどい臭いのする杯を、
父なる神がそれをよろこばれるからである。

23. アリア (バス)

わたしもよろこんで、
十字架と苦杯を受け入れ、
救い主にならって飲み干そう。
乳と蜜のしたたる
その御口は
苦難のもとと
辛い恥を
最初の一飲みで甘くしてくださった。

24. レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

イエスは、弟子たちのところへ戻ってご覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。

バス (イエス)

「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか、誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱い。」

テノール (福音史家)

更に、二度目に向こうへ行って祈られた。

バス (イエス)

「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたの御心が行われますように。」

25. 合唱

御心のままに常に行われますように、
御心こそ最良のもの、
神を堅く信じるものを、
神は常に助けられる。

Er hilft aus Not, der fromme Gott,
Und züchtigt mit Massen.
Wer Gott vertraut, fest auf ihn baut,
Den will er nicht verlassen.

26.(32.) Rezitativ T. B. I B. II (Evangelist, Jesus, Judas)

Tenor

*Und er kam und fand sie aber schlafend, und ihre Augen waren voll Schlafs
Und er liess sie und ging abermal hin und betete zum drittenmal und redete
dieselbigen Worte. Da kam er zu seinen Jüngern und sprach zu ihnen:*

Bass I

*Ach! wollt ihr nun schlafen und ruhen? Siehe, die Stunde ist hie, dass des
Menschen Sohn in der Sünder Hände überantwortet wird. Stehet auf, lasset
uns gehen; siehe, er ist da, der mich verrät.*

Tenor

*Und als er noch redete, siehe, da kam Judas, der Zwölften einer, und mit ihm
eine grosse Schar mit Schwertern und mit Stangen von den Hohenpriestern und
Ältesten des Volks. Und der Verräter hatte ihnen ein Zeichen gegeben und
gesagt: »Welchen ich küssen werde, der ist's, den greifet!« Und alsbald trat er zu
Jesu und sprach:*

Bass II

Gegrüßet seist du, Rabbi!

Tenor

Und küsstete ihn. Jesus aber sprach zu ihm:

Bass I

Mein Freund, warum bist du kommen?

Tenor

Da traten sie hinzu und legten die Hände an Jesum und griffen ihn.

27.a(33.) Arie(Duett) S. A. und Chor

So ist mein Jesus nun gefangen.
Lasst ihn, haltet, bindet nicht!
Mond und Licht
Ist vor Schmerzen untergangen,
Weil mein Jesus ist gefangen.

正しき神は、苦難から助けられ、
そして適度に懲らしめられる。
神を信じ、堅く信頼する者を、
神が見捨てられることはない。

[ブランデンブルク辺境伯アルブレヒト作のコラール(1547)の第1節]

26. レチタティーヴォ (テノール, バス I, バス II)

テノール (福音史家)

イエスが再び戻ってご覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠ったので
ある。そこで、彼らを離れ、また向こうへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。
それから、弟子たちのところに戻ってきて言われた。

バス I (イエス)

「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たち
の手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

テノール (福音史家)

イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやってきた。祭司長
たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、刺や棒を持って一緒に来た。
イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを
捕まえろ」と、前もって合図を決めていた。
ユダはすぐイエスに近寄って言った。

バス II (ユダ)

「先生、こんばんは。」

テノール (福音史家)

そして接吻した。イエスは言われた。

バス I (イエス)

「友よ、あなたはなぜ来たのか。」

テノール (福音史家)

すると人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえた。

27. ♫二重唱と合唱

こうしてわたしのイエスは捕らえられた。

「放せ、待て、縛るな。」

月も光も

苦悩のあまり沈んでしまった、

わたしのイエスが捕らわれたからだ。

Lasst ihn, haltet, bindet nicht!
Sie führen ihn, er ist gebunden.

27.b Chor

Sich Blitze, sind Donner in Wolken verschwunden?
Eröffne den feurigen Abgrund, o Hölle,
Zertrümme, verderbe, verschlinge, zerschelle
Mit plötzlicher Wut
Den falschen Verräter, das mörderische Blut!

28.(34.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

Und siehe, einer aus denen, die mit Jesu waren, reckete die Hand aus und schlug des Hohenpriesters Knecht und hieb ihm ein Ohr ab. Da sprach Jesus zu ihm:

Bass

Stecke dein Schwert an seinen Ort; denn wer das Schwert nimmt, der soll durchs Schwert umkommen. Oder meinst du, dass ich nicht könnte meinen Vater bitten, dass er mir zuschicke mehr denn zwölf Legion Engel? Wie würde aber die Schrift erfüllet? Es muss also gehen.

Tenor

Zu der Stund sprach Jesus zu den Scharen:

Bass

Ihr seid ausgegangen als zu einem Mörder, mit Schwerten und mit Stangen, mich zu fahen; bin ich doch täglich bei euch gesessen und habe gelehret im Tempel, und ihr habt mich nicht gegriffen. Aber das ist alles geschehen, dass erfüllet würden die Schriften der Propheten.

Tenor

Da verliessen ihn alle Jünger und flohen.

29.(35.) Chor

O Mensch, beweine deine Sünde gross,
Darum Christus seines Vaters Schoss
Äussert und kam auf Erden;
Von einer Jungfrau rein und zart
Für uns er hie geboren ward,
Er wollt der Mittler werden.
Den Toten er das Leben gab
Und legt darbei all Krankheit ab,

「放せ、待て、縛るな」。

人々はイエスを引いてゆく、あの方は縛られている。

27. b 合唱

稲妻も雷鳴も雲間に消えたのか、
業火の奈落よ開け、おお、地獄よ、
打ち砕け、滅ぼせ、飲み込め、粉碎せよ
激しい怒りを持って
悪しき裏切り者、あの人殺しを。

28. レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは言われた。

バス (イエス)

「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう」。

テノール (福音史家)

またそのとき、群衆に言われた。

バス (イエス)

「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内に座って教えていたのに、あなた方はわたしを捕らえなかった。このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書いたことが実現するためである」。

テノール (福音史家)

このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

29. 合唱

おお、人よ、おまえの罪が大きいことを泣きなさい、
そのためにキリストは御父のふところから出て
地上へと下られたのだ。
清く優しい乙女から
われらのためにお生まれになった。
あの方は仲介者なることを望まれたのだ。
死者に生命を与え
すべての病を取り去られた。

Bis sich die Zeit herdrange,
Dass er für uns geopfert würd,
Trüg unsrer Sünden schwere Bürd
Wohl an dem Kreuze lange.

Zweiter Teil

30.(36.) Arie A. und Chor

Ach! nun ist mein Jesus hin!
Wo ist denn dein Freund hingegangen,
O du Schönste unter den Weibern?
Ist es möglich, kann ich schauen?
Wo hat sich dein Freund hingewandt?
Ach! mein Lamm in Tigerklauen,
Ach! wo ist mein Jesus hin?
So wollen wir mit dir ihn suchen.
Ach! was soll ich der Seele sagen,
Wenn sie mich wird ängstlich fragen?
Ach! wo ist mein Jesus hin?

31.(37.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Die aber Jesum gegriffen hatten, führten ihn zu dem Hohenpriester Kaiphas, dahin die Schriftgelehrten und Ältesten sich versammelt hatten. Petrus aber folgte ihm nach von ferne bis in den Palast des Hohenpriesters und ging hinein und setzte sich bei die Knechte, auf dass er sithe, wo es hinaus wollte. Die Hohenpriester aber und Ältesten und der ganze Rat suchten falsche Zeugnis wider Jesum, auf dass sie ihn töteten, und funden keines.

32.(38.) Chor

Mir hat die Welt trüglich gericht'
Mit Lügen und mit falschem G'dicht,
Viel Netz und heimlich Stricke.
Herr, nimm mein wahr in dieser G'fahr,
B'hüt mich für falschen Tücken!¹⁵

33.(39.) Rezitativ T. I A. T. II B. (Evangelist, Zeugen, Hoherpriester)

Tenor I

Und wiewohl viel falsche Zeugen herzutraten, funden sie doch keins. Zuletzt traten herzu zween falsche Zeugen und sprachen:

われらのための犠牲となられる時が来て、
われらの罪の重荷を
長く十字架とともに背負われたのだ。

[ゼーバルト・ハイデン作のコラール(1525)の第1節]

第2部

30.アリア(アルト)と合唱

ああ、わたしのイエスは行ってしまった、
おまえの愛する人はどこへ行った、
女たちの中で最も美しい人よ、
こんなことがあってよいのかしら、
わたしは見る事ができるのかしら
おまえの愛する人はどこへ行った、
ああ、わたしの子羊は虎の爪にかかってしまった、
ああ、わたしのイエスはどこに行ったの、
ではわたしたちがおまえといっしょにあの方を捜そう、
ああ、魂が不安げに「わたしのイエスはどこに」と問うなら、わたしは何と答えたらよいのだろう。

31.レチタティーヴォ

テノール(福音史家)

人々はイエスを捕らえると、大祭司カイアファのところへ連れていった。そこには、律法学者たちや長老たちが集まっていた。ペトロは速く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで行き、事の成り行きを見ようと、中に入って、下役たちと一緒に座っていた。さて、祭司長たちと長老たち、最高法院の全員は、死刑にしようとしてイエスにとって不利な偽証を求めたが、何も得られなかった。

32.合唱

この世はわたしに欺き、仕掛けた
虚偽と捏造にみちた、
多くの網とひそかな罠を、
主よ、この危機にあつて、わたしを顧みられ、
いつわりの悪巧みからわたしをお守りください。
[アダム・ロイスナー作のコラール「われ汝に希望を抱けり、主よ」In dich habe ich gehofft, Herr(1533)の第5節]

33.レチタティーヴォ(テノールI, アルト, テノールII, バス)

テノールI(福音史家)

偽証人は何人も現れたが、証拠は得られなかった、
最後に二人の者が来て告げた。

Alt, Tenor II

Er hat gesagt: Ich kann den Tempel Gottes abbrechen und in dreien Tagen denselben bauen.

Tenor I

Und der Hohepriester stand auf und sprach zu ihm:

Bass

Antwortest du nichts zu dem, das diese wider dich zeugen?

Tenor I

Aber Jesus schwieg stille.

34.(40.) Rezitativ T.

Mein Jesus schweigt
Zu falschen Lügen stille,
Um uns damit zu zeigen,
Dass sein Erbarmens voller Wille
Vor uns zum Leiden sei geneigt,
Und dass wir in dergleichen Pein
Ihm sollen ähnlich sein
Und in Verfolgung stille schweigen.

35.(41.) Arie T.

Geduld!
Wenn mich falsche Zungen stechen.
Leid ich wider meine Schuld
Schimpf und Spott,
Ei, so mag der liebe Gott
Meines Herzens Unschuld rächen.

36. a(42.) Rezitativ T. B. I B. II (Evangelist, Hohepriester, Jesus)

Tenor

Und der Hohepriester antwortete und sprach zu ihm:

Bass I

Ich beschwöre dich bei dem lebendigen Gott, dass du uns sagest, ob du seiest Christus, der Sohn Gottes?

Tenor

Jesus sprach zu ihm:

アルト, テノールII

「この男は「神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てることができる」と言いました」。

テノールI (福音史家)

そこで大祭司は立ち上がり、イエスに言った。

バス

「何も答えないのか、この者たちがおまえに不利な証言をしているが、どうなのか」。

テノールI (福音史家)

イエスは黙り続けておられた。

34. レチタティーヴォ

わたしのイエスは
偽りの証にも黙り続けられる、
それは憐れみに満ちた御心が
ご受難を望まれていることを
われらに示されるためである、
そしてわれわれも、同じような苦しみのおきも
イエスに学び、迫害にあっても黙り続けるよう
示されるためである

35. アリア (テノール)

耐え忍ぼう
偽りの舌がわたしを刺すときも、
たとえ身に覚えのない
侮辱と嘲笑を受けても、
愛する御神は
この心の潔白に報いてくださるだろう。

36. aレチタティーヴォ (テノール, バスI, バスII)

テノール (福音史家)

大祭司は言った。

バスI (大祭司)

「生ける神に誓って我々に答えよ。
おまえは神の子、メシアなのか」。

テノール (福音史家)

イエスは言われた。

Bass II

Du sagest's. Doch sage ich euch: Von nun an wird's geschehen, dass ihr sehen werdet des Menschen Sohn sitzen zur Rechten der Kraft und kommen in den Wolken des Himmels.

Tenor

Da zerriss der Hohepriester seine Kleider und sprach:

Bass I

Er hat Gott gelästert; was dürfen wir weiter Zeugnis? Siehe, itzt habt ihr seine Gotteslästerung gehört. Was dünket euch?

Tenor

Sie antworteten und sprachen:

36. b Chor

Er ist des Todes schuldig!

36. c(43.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Da spielten sie aus in sein Angesicht und schlugen ihn mit Fäusten. Etliche aber schlugen ihn ins Angesicht und sprachen:

36. d Chor

Weissage uns, Christe, wer ist's, der dich schlug?

37.(44.) Chor

Wer hat dich so geschlagen,

Mein Heil, und dich mit Plagen

So übel zugericht?

Du bist ja nicht ein Sünder

Wie wir und unsre Kinder;

Von Missetaten weisst du nicht.

38. a(45.) Rezitativ T. S. B. (Evangelist, Magd, Petrus)

Tenor

Petrus aber sass draussen im Palast;

und es trat zu ihm eine Magd und sprach:

バスII (イエス)

「それは、あなたが言ったことです。しかし、わたしは言っておく、
あなたたちはやがて、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗って来るのを見る」。

テノール (福音史家)

そこで、大祭司は服を引き裂きながら言った、

バスI (大祭司)

「神を冒瀆した。これでもまだ証人が必要だろうか。
諸君は今、冒瀆の言葉を聞いた。どう思うか」。

テノール (福音史家)

人々は答えた、

36. b 合唱

「死刑にすべきだ」。

36. c レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

そして、イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、
ある者は平手で打ちながら言った、

36. d 合唱

「メシア、お前を殴ったのはだれか、言い当ててみろ」。

37. 合唱

だれがあなたを打ったのか、

わが救いよ、だれがあなたをそれほど

苦難で悩ませるのか、

あなたはわたしたちのような罪人ではない、

あなたは悪行など知らないのだ、

[バウル・ゲルハルト作のコラール「おお俗世よ、お前の生活を見よ」O Welt, sieh hier dein Leben(1647)の第3節]

38. a レチタティーヴォ (テノール, ソプラノ, バス)

テノール (福音史家)

ペトロは外にいて中庭に座っていた、

そこへ一人の女中が近寄ってきて言った、

Sopran

Und du warest auch mit dem Jesu aus Galiläa.

Tenor

Er leugnete aber vor ihnen allen und sprach:

Bass

Ich weiss nicht, was du sagest.

Tenor

Als er aber zur Tür hinausging, sahe ihm eine andere und sprach zu denen, die da waren:

Sopran

Dieser war auch mit dem Jesu von Nazareth.

Tenor

Und er leugnete abermal und schwur dazu:

Bass

Ich kenne des Menschen nicht.

Tenor

Und über eine kleine Weile traten hinzu, die da stunden, und sprachen zu Petro:

38. b(46.) Chor

Wahrlich, du bist auch einer von denen; denn deine Sprache verrät dich.

38. c Rezitativ T. B. (Evangelist, Petrus)

Tenor

Da hub er an, sich zu verfluchen und zu schwören:

Bass

Ich kenne des Menschen nicht.

Tenor

Und alsbald krähete der Hahn. Da dachte Petrus an die Worte Jesu, da er zu ihm sagte: Ehe der Hahn krähen wird, wirst du mich dreimal verleugnen. Und ging heraus und weinete bitterlich.

ソプラノ (女中)

「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」。

テノール (福音史家)

ペトロは皆の前でそれを打ち消して言った。

バス (ペトロ)

「何のことを言っているのか、わたしには分からない」。

テノール (福音史家)

ペトロが門の方に行くと、ほかの女中が彼に目を留め、居合わせた人々に言った。

ソプラノ (女中)

「この人はナザレのイエスと一緒にいました」。

テノール (福音史家)

そこで、ペトロは再び、誓って打ち消した。

バス (ペトロ)

「そんな人は知らない」。

テノール (福音史家)

しばらくして、そこにいた人々が近寄って来てペトロに言った。

38. b 合唱

「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる」。

38. c レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

そのとき、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら誓い始めた。

バス (ペトロ)

「そんな人は知らない」。

テノール (福音史家)

するとすぐ、鶏が鳴いた。ペトロは「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。

39.(47.) Arie A.

Erbarme dich,
Mein Gott, um meiner Zähren willen!
Schaue hier,
Herz und Auge weint vor dir
Bitterlich.

40.(48.) Chor

Bin ich gleich von dir gewichen,
Stell ich mich doch wieder ein;
Hat uns doch dein Sohn verglichen
Durch sein' Angst und Todespein.
Ich verleugne nicht die Schuld;
Aber deine Gnad und Huld
Ist viel grösser als die Sünde,
Die ich stets in mir befinde.

41. a(49.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Judas)

Tenor

Des Morgens aber hielten alle Hohepriester und die Ältesten des Volkes einen Rat über Jesum, dass sie ihn töteten. Und bunden ihn, führten ihn hin und überantworteten ihn dem Landpfleger Pontio Pilato. Da das sahe Judas, der ihn verraten hatte, dass er verdammt war zum Tode, gereute es ihn und brachte hervieder die dreissig Silberlinge den Hohenpriestern und Ältesten und sprach:

Bass

Ich habe übel getan, dass ich unschuldig Blut verraten habe.

Tenor

Sie sprachen:

41. b Chor

Was gehet uns das an? Da siehe du zu!

41. c(50.) Rezitativ T. B. I B. II (Evangelist, Hohepriester)

Tenor

Und er warf die Silberlinge in den Tempel, hub sich davon, hin und erhitt gete sich selbst. Aber die Hohenpriester nahmen die Silberlinge und sprachen:

39. アリア(アルト)

憐れみたまえ
わが神よ、この涙のゆえに。
ここをご覧なさい
心と目が、あなたの前で
激しく泣いています。

40. 合唱

たとえあなたから離れても、
わたしは再び戻ってまいります。
御子が恐怖と死の苦しみで
われらを購われたのだから、
わたしは罪を否定しないが、
あなたの恵みと恩寵は、
わたしの内なる罪よりも
はるかに大きいのです。

[ヨハン・リスト作のコラール「元気になれ、わが心よ」Werde munter, mein Gemüte(1642)の第6節]

41. a レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

夜が明けると、祭司長たちと民の長老たち一同は、イエスを殺そうと相談した。そして、イエスを縛って引いて行き、総督ピラトに渡した。そのころ、イエスを裏切ったユダは、イエスに死の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして言った。

バス (ユダ)

「わたしは罪のない人の血を売り渡し、
罪を犯しました。」

テノール (福音史家)

しかし彼らは言った、

41. b 合唱

「我々の知ったことではない。お前の問題だ。」

41. c レチタティーヴォ (テノール, バスI, バスII)

テノール (福音史家)

そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、
首をつって死んだ。祭司長たちは銀貨を拾い上げて言った。

々に言った。

しを知ら
出て、意

Bass I und Bass II

Es taugt nicht, dass wir sie in den Gotteskasten legen, denn es ist Blutgeld.

42.(51.) Arie B.

Gebt mir meinen Jesum wieder!

Seht, das Geld, den Mörderlohn,

Wirft euch der verlorne Sohn

Zu den Füßen nieder!

43.(52.) Rezitativ T. B. I B. II (Evangelist, Pilatus, Jesus)

Tenor

Sie hielten aber einen Rat und kauften einen Töpfersacker darum zum Begräbnis der Pilger. Daher ist derselbige Acker genennet der Blutacker bis auf den heutigen Tag. Da ist erfüllet, das gesagt ist durch den Propheten Jeremias, da er spricht: »Sie haben genommen dreissig Silberlinge, damit bezahlet ward der Verkaufte, welchen sie kauften von den Kindern Israel, und haben sie gegeben um einen Töpfersacker, als mir der Herr befohlen hat. »Jesus aber stund vor dem Landpfleger; und der Landpfleger fragte ihn und sprach:

Bass I

Bist du der Jüden König?

Tenor

Jesus aber sprach zu ihm:

Bass II

Du sagest's.

Tenor

Und da er verklagt war von den Hohenpriestern und Ältesten, antwortete er nichts. Da sprach Pilatus zu ihm:

Bass I

Hörest du nicht, wie hart sie dich verklagen?

Tenor

Und er antwortete ihm nicht auf ein Wort, also, dass sich auch der Landpfleger sehr verwunderte.

バスI, バスII(祭司長たち)

「これは血の代金だから、神殿の収入にするわけにはいかない。」

42.アリア(バス)

わたしのイエスを返してください。

ご覧なさい、殺しの報酬である金を、

放蕩息子は

あなた方の足元に投げ出しました。

43.レチタティーヴォ(テノール, バスI, バスII)

テノール(福音史家)

祭司長たちは相談のうえ、その金で「陶器職人の畑」を買い、外国人の墓地にすることにした。このため、この畑は今日まで「血の畑」と言われている。こうして、預言者エレミヤを通して言われたことが実現した。「彼らは銀貨三十枚を取った。それは、値踏みされた者、すなわち、イスラエルの子らが値踏みした者の値である。主がわたしにお命じになったように、彼らはこの金で陶器職人の畑を買い取った」。さて、イエスは総督の前に立たれた。総督はイエスに尋問して言った。

バスI(ピラト)

「お前がユダヤ人の王なのか。」

テノール(福音史家)

イエスは言われた。

バスII(イエス)

「それは、あなたが言っていることです。」

テノール(福音史家)

祭司長たちや長老たちから訴えられている間、

これには何もお答えにならなかった。するとピラトは言った。

バスI(ピラト)

「あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞こえないのか。」

テノール(福音史家)

それでも、どんな訴えにもお答えにならなかったため、総督は非常に不思議に思った。

44.(53.) Chor

Befiehl du deine Wege
Und was dein Herze kränkt
Der allertreusten Pflege
Des, der den Himmel lenkt.
Der Wolken, Luft und Winden
Gibt Wege, Lauf und Bahn,
Der wird auch Wege finden,
Da dein Fuss gehen kann.

45. a(54.) Rezitativ T. B. S. und Chor (Evangelist, Pilatus, Pilati Weib, Volk)

Tenor

Auf das Fest aber hatte der Landpfleger Gewohnheit, dem Volk einen Gefangenen loszugeben, welchen sie wollten. Er hatte aber zu der Zeit einen Gefangenen, einen sonderlichen vor andern, der hiess Barrabas. Und da sie versammelt waren, sprach Pilatus zu ihnen:

Bass

Welchen wollet ihr, dass ich euch losgebe? Barrabam oder Jesum, von dem gesaget wird, er sei Christus?

Tenor

Denn er wusste wohl, dass sie ihn aus Neid überantwortet hatten. Und da er auf dem Richtstuhl sass, schickete sein Weib zu ihm und liess ihm sagen:

Sopran

Habe du nichts zu schaffen mit diesem Gerechten; ich habe heute viel erlitten im Traum von seinetwegen!

Tenor

Aber die Hohenpriester und die Ältesten überredeten das Volk, dass sie um Barrabas bitten sollten und Jesum umbrächten. Da antwortete nun der Landpfleger und sprach zu ihnen:

Bass

Welchen wollt ihr unter diesen zweien, den ich euch soll losgeben?

Tenor

Sie sprachen:

Chor

Barrabam!

44.合唱

あなたの歩むべき道と
あなたの心を痛めることを
あの方の御手に委ねなさい、
天を導き、最も信頼に値するあの方の御手に、
雲と空気と風に
道と軌道とを与える方は、
あなたの足が歩むべき道も
見つけてくださることでしょう。

[パウル・ゲルハルト作のコラール(1653)の第1節]

45. a レチタティーヴォ (テノール, バス, ソプラノ) と合唱

テノール (福音史家)

ところで、祭りの度ごとに、総督は囚人を一人釈放することになっていた。そのころ、バラバという評判の囚人がいた。ピラトは、人々が集まって来たときに言った。

バス (ピラト)

「どちらを釈放してほしいのか、バラバか、それともメシアといわれるイエスか」。

テノール (福音史家)

人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。

ソプラノ (ピラトの妻)

「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました」。

テノール (福音史家)

しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようと群衆を説得した。そこで、総督は人々に言った。

バス (ピラト)

「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか」。

テノール (福音史家)

人々は言った。

合唱

「バラバを」。

Tenor

Pilatus sprach zu ihnen:

Bass

Was soll ich denn machen mit Jesu, von dem gesagt wird, er sei Christus?

Tenor

Sie sprachen alle:

45. b Chor

Lass ihn kreuzigen!

46.(55.) Chor

Wie wunderbarlich ist doch diese Strafe!
Der gute Hirte leidet für die Schafe,
Die Schuld bezahlt der Herre, der Gerechte,
Für seine Knechte.

47.(56.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Pilatus)

Tenor

Der Landpfleger sagte:

Bass

Was hat er denn Übels getan?

48.(57.) Rezitativ S.

Er hat uns allen wohlgetan,
Den Blinden gab er das Gesicht,
Die Lahmen macht er gehend,
Er sagt uns seines Vaters Wort,
Er trieb die Teufel fort,
Betrübte hat er aufgerichtet,
Er nahm die Sünder auf und an,
Sonst hat mein Jesus nichts getan.

49.(58.) Arie S.

Aus Liebe,
Aus Liebe will mein Heiland sterben,
Von einer Sünde weiss er nichts.

テノール (福音史家)

ピラトは言った。

バス (ピラト)

「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか。」

テノール (福音史家)

皆は言った。

45. b 合唱

「十字架につけろ。」

46. 合唱

これはなんと驚くべき刑罰だろうか。
善き羊飼いが羊の代わりに苦しみを受け、
義の人である主が、
しもべたちの代わりに負債を払うとは。
[ヨハン・ヘルマン作のコラール「最愛のイエスよ、いかなる罪を犯されたのか」
Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen(1630)の第4節]

47. レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

総督ピラトは言った。

バス (ピラト)

「いったいどんな悪事を働いたというのか。」

48. レチタティーヴォ (ソプラノ)

あの方は良いことだけをされました。
目の見えない人には視力を与え、
足の萎えた人を歩けるようにした。
われらには御父の言葉を伝え、
悪魔を追い払われた。
悲しんでいる人を助け起こし、
罪人を受け入れられた。
わたしのイエスはそれ以外何もしていません。

49. アリア (ソプラノ)

愛ゆえに
わたしのイエスは死のうとしている、
罪とて知らぬ御身であるのに、

Dass das ewige Verderben
Und die Strafe des Gerichts
Nicht auf meiner Seele bliebe.

50. a(59.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Sie schriegen aber noch mehr und sprachen:

50. b Chor

Lass ihn kreuzigen!

50. c Rezitativ T. B. (Evangelist, Pilatus)

Tenor

*Da aber Pilatus sahe, dass er nichts schaffete sondern dass ein viel grösser
Getömmel ward, nahm er Wasser und wusch die Hände vor dem Volk und
sprach:*

Bass

Ich bin unshuldig an dem Blut dieses Gerechten, sehet ihr zu.

Tenor

Da antwortete das ganze Volk und sprach:

50. d Chor

Sein Blut komme über uns und unsre Kinder.

50. e Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

*Da gab er ihnen Barrabam los; aber Jesum liess er geisseln und überantwortete
ihn, dass er gekreuziget wtrde.*

51.(60.) Rezitativ A.

Erbarm es Gott!

Hier steht der Heiland angebunden.

O Geisselung, o Schläg, o Wunden!

Ihr Henker, haltet ein!

Erweicht euch

Der Seelen Schmerz,

Der Anblick solches Jammers nicht?

Ach ja! ihr habt ein Herz,

Das muss der Martersäule gleich

永遠の破滅と
裁きの刑罰とが
わたしの魂にふりかかることがないように。

50. a レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

群衆はますます激しく叫び続けた。

50. b 合唱

「十字架につけろ」。

50. c レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなのを
みて、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。

バス (ピラト)

「この人の血について、わたしには責任がない、お前たちの問題だ」。

テノール (福音史家)

民はこぞって答えた。

50. d 合唱

「その血の責任は、我々と子孫にある」。

50. e レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるため
に引き渡した。

51. レチタティーヴォ (アルト)

神よ憐れみたまえ。

救い主はここに縛られて立っている。

おお、鞭打ち、殴打、御傷。

刑吏たちよ、やめるがよい。

こんな悲惨を

目の当たりにして

心苦しくはならないのか。

おまえたちにも心があるはずだが、

それはまるで拷問の柱か

Und noch viel härter sein.
Erbarmt euch, haltet ein!

52.(61.) Arie A.

Können Tränen meiner Wangen
Nichts erlangen,
O, so nehmt mein Herz hinein!
Aber lasst es bei den Fluten,
Wenn die Wunden milde bluten,
Auch die Opferschale sein!

53. a(62.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Da nahmen die Kriegsknechte des Landpflegers Jesum zu sich in das Richtigthaus und sammelten über ihn die ganze Schar und zogen ihn aus und legeten ihm einen Purpurmantel an und flochten eine dornene Krone und setzten sie auf sein Haupt und ein Rohr in seine rechte Hand und beugeten die Knie vor ihm und spotteten ihn und sprachen:

53. b Chor

Gegrüsst seist du, Jüdenkönig!

53. c Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Und speieten ihn an und nahmen das Rohr und schlugen damit sein Haupt.

54.(63.) Chor

O Haupt voll Blut und Wunden,
Voll Schmerz und voller Hohn,
O Haupt, zu Spott gebunden
Mit einer Dornenkrone,
O Haupt, sonst schön gezieret
Mit höchster Ehr und Zier,
Jetzt aber hoch schimpfieret,
Gegrüsst seist du mir!

Du edles Angesichte,
Dafür sonst schrickt und scheut
Das grosse Weltgewichte,
Wie bist du so bespeit;
Wie bist du so erbleichet!

それ以上に過酷だ。
憐れみの心を持って、やめるがよい。

52.アリア (アルト)

わたしの頬を伝う涙が
無益だというなら、
おお、わが心を取りたまえ、
そして御傷から
慈愛の血があふれるとき
わが心を捧げの受け皿とさせたまえ。

53. a レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、侮辱して言った。

53. b 合唱

「ユダヤ人の王万歳」

53. c レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。

54. 合唱

おお、血と傷にまみれ
苦痛と嘲笑にゆがむ御首よ、
おお、嘲弄のために
茨の冠を巻かれた御首よ、
おお、常ならば最高の名誉で
美しく飾られながら、
今は侮辱の極みを受けている御首よ
こんにちは、

常ならばこの世の権威も
恐れ恥じ入る
貴い顔よ、
それが今はこんなに唾をかけられ、
青ざめている。

Wer hat dein Augenlicht,
Dem sonst kein Licht nicht gleichet,
So schändlich zugericht'?

55.(64.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Und da sie ihn verspottet hatten, zogen sie ihm den Mantel aus und zogen ihm seine Kleider an und führten ihn hin, dass sie ihn kreuzigten. Und indem sie hinausgingen, funden sie einen Menschen von Kyrene mit Namen Simon; den zwungen sie, dass er ihm sein Kreuz trug.

56.(65.) Rezitativ B.

Ja freilich will in uns das Fleisch und Blut
Zum Kreuz gezwungen sein;
Je mehr es unsrer Seele gut,
Je herber geht es ein.

57.(66.) Arie B.

Komm, süßes Kreuz, so will ich sagen,
Mein Jesu, gib es immer her!
Wird mir mein Leiden einst zu schwer,
So hilfst du mir es selber tragen.

58. a(67.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Und da sie an die Stätte kamen mit Namen Golgatha, das ist verdeutschet Schädelstätt, gaben sie ihm Essig zu trinken mit Gallen vernischt; und da er's schmeckete, wollte er's nicht trinken. Da sie ihn aber gekreuziget hatten, teilten sie seine Kleider und warfen das Los darum, auf dass erfüllet würde, das gesagt ist durch den Propheten: »Sie heben meine Kleider unter sich geteilet, und über mein Gewand haben sie das Los geworfen.« Und sie sassen allda und hülleten sein. Und oben zu seinen Häupten hefteten sie die Ursach seines Todes beschrieben, nämlich: »Dies ist Jesus, der Juden König.« Und da wurden zween Mörder mit ihm gekreuziget, einer zur Rechten und einer zur Linken. Die aber vorübergingen, lasterten ihn und schüttelten ihre Köpfe und sprachen:

58. b Chor

Tenor

Der du den Tempel Gottes zerbrichst und bauest ihn in dreien Tagen, hilf dir selber! Bist du Gottes Sohn, so steig herab vom Kreuz!

常ならばいかなる光も及ばない

あなたの眼光に

こんなにもひどい仕打ちをしたのは誰なのだ。

[パウル・ゲルハルト作のコラール(1656)の第1節と第2節]

55. レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。

56. レチタティーヴォ (バス)

当然ながら、われらの肉と血は

十字架を強いられるべきだ。

十字架が苦いものであればあるほど

われらの魂に益をなす。

57. アリア (バス)

おいで甘美な十字架よ、と言いたい。

わたしのイエスよ、常に十字架を負わせてください。

いつか、わたしの苦難が重すぎる時は、

わたしがそれを自ら担うことを助けて下さい。

58. a レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。兵士たちはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合った。これは預言者たちによって言われたことが、成就するためである。「彼らはわたしの服を分け合い

わたしの衣のためにくじを引いた」

兵士たちはそこに座って見張りをしていた。イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。

58. b 合唱

「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、自分を救ってみろ。神の子なら、十字架から降りて来い」。

58. c Rezitativ T. (Evangelist)

Desgleichen auch die Hohenpriester spotteten sein samt den Schriftgelehrten und Ältesten und sprachen:

58. d Chor

Andern hat er geholfen und kann ihm selber nicht helfen. Ist er der König Israel, so steige er nun vom Kreuz, so wollen wir ihm glauben. Er hat Gott vertrauet, der erlöse ihn nun, listet's ihm; denn er hat gesagt: Ich bin Gottes Sohn.

58. e(68.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Desgleichen schmähten ihn auch die Mörder, die mit ihm gekreuzigt waren.

59.(69.) Rezitativ A.

Ach Golgatha, unselges Golgatha!
Der Herr der Herrlichkeit muss schimpflich hier verderben,
Der segnen und das Heil der Welt
Wird als ein Fluch ans Kreuz gestellt.
Der Schöpfer Himmels und der Erden
Soll Erd und Luft entzogen werden.
Die Unschuld muss hier schuldig sterben,
Das gehet meiner Seele nah;
Ach Golgatha, unselges Golgatha!

60.(70.) Arie A. und Chor

Sehet, Jesus hat die Hand,
Uns zu fassen, ausgespannt,
Kommt! – Wohin? – in Jesu Armen
Sucht Erlösung, nehmt Erbarmen,
Suchet! – Wo? – in Jesu Armen.
Lebet, sterbet, ruhet hier,
Ihr verlass'nen Kümmerlein ihr,
Bleibet – Wo? – in Jesu Armen.

61. a(71.) Rezitativ T. B. (Evangelist, Jesus)

Tenor

Und von der sechsten Stunde an war eine Finsternis über das ganze Land bis zu der neunten Stunde. Und um die neunte Stunde schrie Jesus laut und sprach:

58. c レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

同じように祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。

58. d 合唱

「他人は救ったのに、自分は教えない、イスラエルの王だ、今すぐ十字架から降りるがいい、そうすれば、信じてやろう、神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ、「わたしは神の子だ」と言っていたのだから、

58. e レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

59. レチタティーヴォ (アルト)

ああ、ゴルゴタ、呪われたゴルゴタよ。
栄光の主はここで、屈辱のうちに滅びねばならない、
この世の祝福と救いである主は
呪いとして十字架につけられる。
天と地の創り主が
大地と大気を奪われねばならぬのだ。
罪のない方が、ここでは罪を問われて死なねばならない、
それがわたしの魂にこたえる。
ああ、ゴルゴタ、呪われたゴルゴタよ。

60. アリア (アルト) と合唱

ごらん、イエスはわれらを抱くために、
御手を広げられた。
「おいで」「どこに」「イエスの腕の中に」
「救いを求め、憐れみを受けなさい」
「求めなさい」「どこに」「イエスの腕の中に」
ここに生き、死に、憩いなさい。
見捨てられた誰たちよ、
「留まりなさい」「どこに」「イエスの腕の中に」。

61. a レチタティーヴォ (テノール, バス)

テノール (福音史家)

さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。

Bass

Eli, Eli, lama asabthani?

Tenor

Das ist: Mein Gott, mein Gott, warum hast du mich verlassen? Etliche aber, die da stunden, da sie das hörten, sprachen sie:

61. b Chor

Der ruft dem Elias!

61. c Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Und bald lief einer unter ihnen, nahm einen Schwamm und füllte ihn mit Essig und steckte ihn auf ein Rohr und tränkte ihn.

Die andern aber sprachen:

61. d Chor

Halt! lass Sehen, ob Elias komme und ihm helfe?

61. e Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Aber Jesus schrie abermal laut und verschied.

62.(72.) Chor

Wenn ich einmal soll scheiden,

So scheide nicht von mir,

Wenn ich den Tod soll leiden,

So tritt du denn herfür!

Wenn mir am allerbängsten

Wird um das Herze sein,

So reiss mich aus den Ängsten

Kraft deiner Angst und Pein!

63.(73.) a Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Und siehe da, der Vorhang im Tempel zerriss in zwei Stück von oben an bis unten aus. Und die Erde erbebete, und die Felsen zerrissen, und die Gräber tätten sich auf, und stunden auf viel Leiber der Heiligen, die da schliefen, und gingen aus den Gräbern nach seiner Auferstehung und kamen in die heilige Stadt und erschienen vielen.

バス (イエス)

「エリ, エリ, ラマ, アサブタニ。」

テノール (福音史家)

これは、「わが神, わが神, なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そこに居合わせた人々のうちには, これを聞いて, 次のように言う者もいた。

61. b 合唱

「この人はエリアを呼んでいる。」

61. c レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

そのうちの一人が, すぐに走り寄り, 海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ, 葦の棒に付けて, イエスに飲ませようとした。ほかの人々は言った。

61. d 合唱

「待て, エリアが彼を救いに来るかどうか, 見ていよう。」

61. e レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

しかし, イエスは再び大声で叫び, 息を引き取られた。

62. 合唱

いつの日かわたしが逝かねばならぬとき,

わたしから離れないでください,

わたしが死の苦しみに耐えねばならぬとき,

どうかあなたが現れてくださるように,

わたしの心に

大きな不安があるとき,

どうかわたしをその恐怖から引き離してください

あなたの不安と苦痛の力によって,

[パウル・ゲルハルト作のコラール「おお, こうべは血と傷にまみれ」O Haupt voll Blut und Wunden(1656)の第9節]

63. a レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

そのとき, 神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け, 地震が起こり, 岩が裂け, 墓が開いて, 眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして, イエスの復活の後, 墓から出てきて, 聖なる都に入り, 多くの人々が現れた。

Aber der Hauptmann und die bei ihm waren und bewahreten Jesum, da sie sahen das Erdbeben und was da geschah, erschrakten sie sehr und sprachen:

63. b Chor

Wahrlich, dieser ist Gottes Sohn gewesen.

63. c Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Und es waren viel Weiber da, die von ferne zusahen, die da waren nachgefolget aus Galiläa und hatten ihm gedienet, unter welchen war Maria Magdalena und Maria, die Mutter Jacobi und Joses und die Mutter der Kinder Zebedii. Am Abend aber kam ein reicher Mann von Arimathia, der hiess Joseph, welcher auch ein Jünger Jesu war, der ging zu Pilato und bat ihn um den Leichnam Jesu. Da befahl Pilatus, man sollte ihm ihn geben.

64.(74.) Rezitativ B.

Am Abend, da es kühle war,
Ward Adams Fallen offenbar;
Am Abend drückt ihn der Heiland nieder.
Am Abend kam die Taube wieder
Und trug ein Ölblatt in dem Munde.
O schöne Zeit! O Abendstunde!
Der Friedensschluss ist nun mit Gott gemacht,
Denn Jesus hat sein Kreuz vollbracht.
Sein Leichnam kömmt zur Ruh,
Ach! liebe Seele, bitte du,
Geh, lasse die den toten Jesum schenken,
O heilsames, o köstlichs Angedenken!

65.(75.) Arie B.

Mache dich mein Herze, rein,
Ich will Jesum selbst begraben.
Denn er soll nunmehr in mir
Für und für
Seine süsse Ruhe haben.
Welt, geh aus, lass Jesum ein!

66. a(76.) Rezitativ T. (Evangelist)

Tenor

Und Joseph nahm den Leib und wickelte ihn in ein rein Leinwand und legte ihn in sein eigen neu Grab, welches er hatte lassen in einen Fels hauen, und

百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れて言った。

63. b 合唱

「本当に、この人は神の子だった。」

63. c レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベタイの子らの母がいた。夕方になると、アリマタヤ出身の金持ちでヨセフという人が来た。この人もイエスの弟子であった。この人がピラトのところに行って、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。そこでピラトは、渡すようにと命じた。

64. レチタティーヴォ (バス)

その夕べ、涼しくなったころ
アダムの墮落が明らかとなった
その夕べ、救い主は人の墮落に打ち勝った。
その夕べ、鳩は再び選った
嘴にオリーブの葉をくわえて。
おお、美しい時よ、おお、夕べの時よ、
いまこそ神との平和の契りが結ばれた、
イエスが彼の十字架を成就したからである。
あの方の御体は安息に至る。
ああ、愛する魂よ、願いなさい、
行って、死んだイエスをもらい請けなさい、
おお、救いの力に満ちた、貴い形見よ。

65. アリア (バス)

わが心よ、自分を浄めなさい、
わたしはイエスをこの身の中に葬ります。
あの方は今こそわたしの中で
永久に
甘美な安らぎを得られるべきだから。
この世よ出て行け、イエスを迎えよう。

66. a レチタティーヴォ

テノール (福音史家)

ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、墓の入り口には大きな石を転がしておいて立ち去った。マ

wälzte einen grossen Stein vor die Thür des Grabes und ging davon. Es war aber allda Maria Magdalena und die andere Maria, die satzten sich gegen das Grab. Des andern Tages, der da folget nach dem Rüsttage, kamen die Hohenpriester und Pharistier sämtlich zu Pilato und sprachen:

66. b Chor

Herr, wir haben gedacht, dass dieser Verführer sprach, da er noch lebete: Ich will nach dreien Tagen wieder auferstehen. Darum befiehl, dass man das Grab verwahre bis an den dritten Tag, auf dass nicht seine Jünger kommen und stehlen ihn und sagen zu dem Volk: Er ist auferstanden von den Toten, und werde der letzte Betrug ärger denn der erste!

66. c Rezitativ T. B. (Evangelist, Pilatus)

Tenor

Pilatus sprach zu ihnen:

Bass

Da habt ihr die Hüter; gehet hin und verwahret's, wie ihr's wisset!

Tenor

Sie gingen hin und verwahreten das Grab mit Hütern und versiegelten den Stein.

67.(77.) Rezitativ B. T. A. S. und Chor

Bass

Nun ist der Herr zur Ruh gebracht.

Mein Jesu, gute Nacht!

Tenor

Die Müh ist aus, die unsre Stünden ihm gemacht.

Mein Jesu, gute Nacht!

Alt

O selige Gebeine,

Seht, wie ich euch mit Buss und Reu beweine,

Dass euch mein Fall in solche Not gebracht!

Mein Jesu, gute Nacht!

Sopran

Habt lebenslang

Vor ever Leiden tausend Dank,

Dass ihr mein Seelenheil so wert geacht!

Mein Jesu, gute Nacht!

グダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた。明るる日、すなわち準備の日の翌日、祭司長たちとファリサイ派の人々は、ピラトの所に集まって、こう言った。

66. b 合唱

「閣下、人を恐らすあの者がまだ生きていたとき、「自分は三日後に復活する」と言っていたのを、わたしたちは思い出しました。ですから、三日目まで墓を見張るように命令してください。そうでないと、弟子たちが来て死体を盗み出し、「イエスは死者の中から復活した」などと民衆に言いふらすかもしれません。そうになると、人々は前よりもひどく惑わされることになります。」

66. c レチタティーヴォ (バス、テノール、アルト、ソプラノ) と合唱

テノール (福音史家)

ピラトは言った。

バス (ピラト)

「あなたたちには、番兵がいるはずだ。行って、しっかりと見張らせるがよい。」

テノール (福音史家)

そこで、彼らは行って番兵とともに墓を守り、墓石に封印をした。

67. レチタティーヴォ (バス、テノール、アルト、ソプラノ) と合唱

バス

今こそ主は、安らぎの床にもたらされた。

「わたしのイエスよおやすみなさい。」

テノール

われらの罪が主に負わせた労苦は終わった。

「わたしのイエスよ、おやすみなさい。」

アルト

おお、浄福の御遺骸よ、

ご覧ください、どんなにわたしが懺悔と悔恨の心で涙しているのを、

わたしの罪があなたをこのような苦しみに陥れたのです。

「わたしのイエスよ、おやすみなさい。」

ソプラノ

生きている限り

あなたの受難に感謝を捧げます。

あなたは、わたしの魂の救いを尊重してくださった。

「わたしのイエスよ、おやすみなさい。」

68.(78.) Chor

Wir setzen uns mit Tränen nieder
Und rufen dir im Grabe zu:
Ruhe sanfte, sanfte ruh!
Ruhet, ihr ausgesognen Glieder!
Euer Grab und Leichenstein
Soll dem ängstlichen Gewissen
Ein bequemes Ruhekissen
Und der Seelen Ruhstatt sein.
Höchst vergnügt schlummern da die Augen ein.

●ドイツ語歌詞の底本としては、Werner Neumann (Hrsg.), *Sämtliche von Johann Sebastian Bach vertonte Texte*, Leipzig 1974を使用した。邦訳にあたり、聖書の章句〔マタイによる福音書第26章と第27章と雅歌 6,1 (第30曲)〕は、『聖書新共同訳』（日本聖書協会、1987年）に準拠した。ただしドイツ語歌詞はルター訳のドイツ語聖書にもとづいているため、両者の解釈が明らかに異なる場合には、ドイツ語歌詞に即して訳出した。なお、聖書の章句は斜体、コラールは太字で区別している。

68.合唱

われら涙してひざまづき
墓の中のあなたに呼びかける。
憩え安らかに、安らかに憩いたまえ。
憩いたまえ、使い果たした御身体よ。
あなたの墓と墓石は
悩める良心には
心地よい安らぎの枕
魂の休息所です。
心から満足して、この目はここでまどろむのです。

ジャパン・アーツが贈る珠玉のコンサート

注目のソリストを迎えて
巨匠が魅せる
新しい世界



巨匠スヴェトラーノフ + 我が国が誇る世界のピアニスト中村絃子 + 96ロン＝ティボー国際コンクール優勝の17才の大器 榎本大進

ロシア国立交響楽団

4/21(日) サントリーホール
チャイコフスキー
ヴァイオリン協奏曲 二長調
チャイコフスキー
交響曲第5番

Y15,000 AY13,000 BY10,000 CY7,000 DY5,000

4/23(土) 東京国際フォーラム
ホールC
ラフマニノフ
パガニーニの主題による狂詩曲
ブラームス
交響曲第1番

4/28(日) 東京芸術劇場
モーツァルト
交響曲第34番
マーラー
交響曲「巨人」



4/17(木) 東京都立文化会館(諏訪内)057(28)0011 4/18(金) 東京都立文化会館(諏訪内)0764(32)5555 4/20(日) サントリーホール(榎本)00(453)8000 4/24(木) 阿賀野カノラホール(中村)0266(24)1300 4/26(土) 土曜和泉芸術劇場(中村)052(203)0250 4/27(日) 浜松アクティシティ(中村)053(451)1114 5/2(金) 泉の森ホール(中村)0724(69)7101 *中村・榎本の曲日は、それぞれ4/23、4/21と同じ曲。諏訪内島子はグラスノフのヴァイオリン協奏曲です。

ロマンティック&エキサイティング。プレトニョフ(28日) 三船優子(31日) 前橋汀子(1日) —— 豪華ソリストと多彩なプログラム。

レニングラード交響楽団

指揮(5/28-6/1)
アレクサンドル
ドミトリエフ

5/28(日) 東京芸術劇場
ラフマニノフ
ピアノ協奏曲第3番
チャイコフスキー
交響曲第6番「悲愴」

5/31(木) 東京芸術劇場
比志康一「日本スケッチ」
チャイコフスキー
ピアノ協奏曲第1番
ショスタコーヴィチ
交響曲第5番「革命」

6/1(日) サントリーホール
ベートーヴェン
ヴァイオリン協奏曲
チャイコフスキー
交響曲第5番

指揮(5/31)
小松一彦



SY12,000 AY10,000 BY8,000
CY6,000 DY4,000
特別協賛:株式会社メニコン
(6/1のみ)

5/25(日) 豊野市文化会館0463(81)1211 6/4(水) 武生市文化センター0778(23)5057 6/8(日) 山口県民文化ホール0839(33)2610 6/10(火) 福山リーデンローズ0849(56)2347 6/12(木) 沖縄コンベンション098(888)2204

富士通コンサートシリーズ



首席指揮者
ネーメ
ヤルヴィ

横山 幸雄

名匠ヤルヴィ率いるスウェーデンの名門オーケストラ

エーテボリ交響楽団

6/28(土) 6:00 東京芸術劇場
トッピン: バレエ組曲「クラット」
グリーグ: ピアノ協奏曲 イ短調
ベルリオーズ:
幻想交響曲 作品14

ワティム・レービン

7/8(火) 7:00 サントリーホール
〈オール・シベリウス・プログラム〉
交響詩「フィンランディア」
ヴァイオリン協奏曲 二短調
交響曲 第2番

SY12,000 AY10,000 BY8,000 CY6,000 DY4,000

華麗なるバッハの名曲を伝統のなせる技で演奏!

ゲヴァントハウス バッハ・オーケストラ



指揮・ヴァイオリン
クリスチャン・フンケ

7/4(金) 7:00 東京国際フォーラム(ホールC)
バッハ: プランテンブルグ協奏曲第5番/ヴァイオリン協奏曲第2番
オーボエとヴァイオリンの為の協奏曲
チェンバロ協奏曲/管弦楽組曲第2番

7/16(水) 7:00
東京国際フォーラム
(ホールC)
— 曲目未定 —



人のいるところには夢がある。



アーツ・クラシック

ジャパン・アーツ チケットセンター 03-3499-9990

◆ドレスデン聖十字楽合唱団 1997年日本公演プログラム 企画・編集: ジャパン・アーツ/デザイン: ベルク/写真提供: M.Krüber/印刷: 文化堂印刷所



JAPAN ARTS



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie